

ISSN 1883-9924

甲南英文学

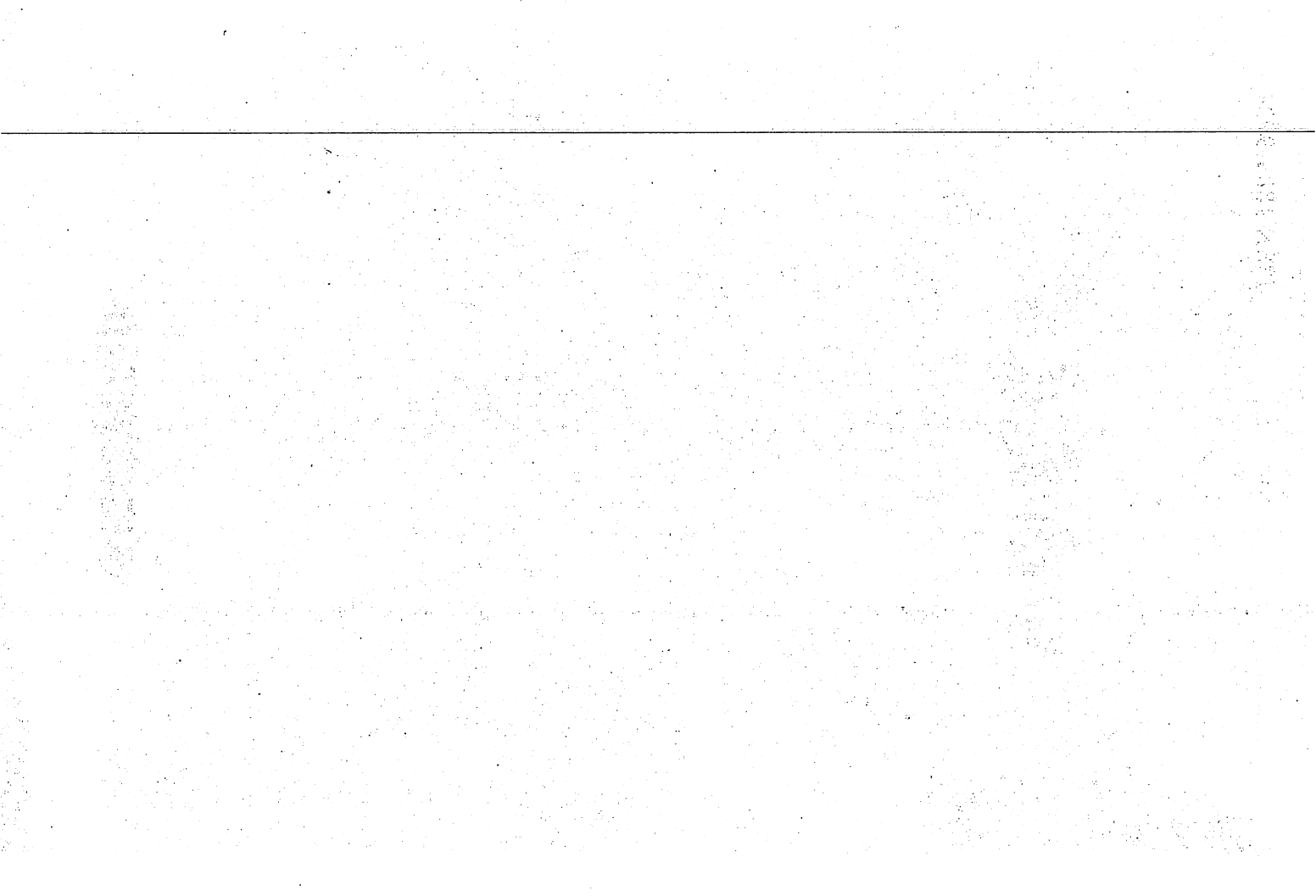
No. 29 春 2014

甲南英文学会



甲南英文学

甲南英文学会



編集委員

(五十音順、*印は編集委員長)

有村兼彬 中島信夫 古川武史 *福島彰利

目次

—— 論文 ——

副詞類効果・・・・・・・・・・・・・・・・ 北峯 裕士 1

On the Status of Subject in the Non-finite Clause・・・ Kazukuni Sado 19

—— 研究ノート ——

A Valediction・・・・・・・・・・・・・・・・ David W. Rycroft 41

「文明化の使命」と環太平洋地域の女性たち・・・ 安武 留美 47

霊魂／霊／魂 ≠ Soul／Spirit・・・・・・・・ 青山 義孝 51

—— 書評 ——

Paul Auster,

Report from the Interior (Henry Holt, 2013) 秋元 孝文 103

1944-1945

1946-1947

1948-1949

1950-1951

1952-1953

1954-1955

1956-1957

1958-1959

1960-1961

副詞類効果

北峯裕士

SYNOPSIS

It is often said in the literature that *that-t* effect is mitigated by fronted adverbials but not by fronted topic elements. In this paper, this contrast is treated in terms of the left periphery position a complementizer *that* moves from and occupies in these constructions. In particular, I will argue that, without adopting ECP based licensing condition, the possibility of the movement of a complementizer determines that of the extraction out of CP which contains a fronted element.

0. はじめに

次のような、主語と目的語の非対称性は、従来の GB 理論の枠組みで、ECP¹で説明がされてきた。

(1)a. *Who do you think that t will come?

b. Who do you think that Mary will meet t?

(2)a. *Qui crois-tu que t viendra?

b. Qui crois-tu que Marie rencontrera t?

特に(1a)、(2a)は、*that-t* 効果と呼ばれ、主語の疑問詞の移動により生じた痕跡 *t* が補文標識 *that* の介在により先行詞統率されず ECP の違

反とされてきた。

しかしながら、次の(3)のように主語の痕跡 *t* と補文標識 *that* の間に副詞類が介在すると、非文法性は生じない。

(3)a. Robin met the man Leslie said that *for all intents and purposes* was the mayor of the city.

b. I asked what Leslie said that *in her opinion* had made Robin give a book to Lee.

c. Lee forgot which dishes Leslie had said that *under normal circumstances* should be put on the table.

(4)a. *Robin met the man Leslie said that was the mayor of this town.

b. *I asked what Leslie said that had made Robin give a book to Lee.

c. *Lee forgot which dishes Leslie had said that should be put on the table.

上の(3)の文すべてにおいて存在する主語痕跡が、(4)の場合と同様に、先行詞統率されず、ECP 違反となってしまう。

本稿では、(3)のような現象を副詞類効果と呼ぶことにするが、(3)と(4)の文法的な差がなぜ生じるのか、ミニマリストの枠組みで、左辺周辺部の構造を仮定し、考察していく。具体的には、次の1節で、先行研究として Rizzi(2006)、Pesetsky&Torrego(2001)を順次、概観し、それぞれの問題点を指摘する。2節では、Browning(1996)の枠組みを概観し、3節で問題の解消を試みる。

1. 先行研究

1.1. Rizzi(2006)

Rizzi(2006)は、次の(1a,2a)と(1b,2b)における主語・目的語の非対称性を **Subject Criterion** という概念で説明している。

(1)a. *Who do you think that t will come?

b. Who do you think that Mary will meet t?

(2)a. *Qui crois-tu que t viendra?

b. Qui crois-tu que Marie rencontrera t?

彼によると、**Criterial Position** というのは、次の(5)が示すように、**interrogative**、**topic**、**focus** に付け加えて、上の(1a,2a)に痕跡が現れている **subject** も含まれる。

(5)a. Which book should you readt?

b. This book, you should read t?

c. THIS BOOK you should readt? (rather than something else)

項の移動が生じる場合、 θ 位置から、**Criterial Position** へ移動することになるが、次の **Criterial Freezing** が有るとし、その位置へ移動するとそれ以上移動できないと考えている。

(6) Criterial Freezing

A phrase meeting a criterion is frozen in place.

したがって、(5)の *Which book*、*This book*、*THIS BOOK* は、その位置にとどまり、これ以上移動できない。また問題となっている主語・目的語の非対称性を示す(1)と(2)だが、(1a,2a)における *Who/Qui* は、動詞 *come/viendra* の投射内部から、**Criteria Position** である主語位置へ一旦移動している。(6)により、その主語位置（つまり痕跡が現れている位置）より先に移動できない。一方、文法的な(1b,2b)では、主語とは異なり、**Interrogative Position** への移動以前に **Criteria Position** への移動がない。また、彼は、虚辞が現れている場合との違いも説明できるとしている。

(7)a. *What do you think that t is in the box?

b. What do you think that there is t in the box?

非文法的な(7a)では、従節において、*What* が主語位置へ移動し、**Subject Criterion** を満たし、それ以上の移動は、(6)により、できない。一方(7b)では、虚辞 *there* が **Subject Criterion** を満たしているわけで、*What* は、移動可能となる。

このように、Rizzi(2006)では、非常にエレガントに主語・目的語の非対称性を説明しているように思われるが、問題が無いというわけではない。次の例文では、主語からの移動が生じている。

(8) Who do you think t came?

今までの話によると、*Who* は *came* の投射内から主語位置へ移動し、**Subject Criterion** を満たし、それ以上移動できないことになる。彼は、CP+SubjP という複合構造の削除なるものを示唆しているが、どのよ

うな場合、削除が行われ、また行われぬのかはっきりしていないので、非常にアドホックに思われる。仮に補文標識 *that* が生じない場合、CP+SubjP 削除が行われるとしても、次の副詞類効果の場合など、まったく説明がつかない。

(3)a. Robin met the man Leslie said that *for all intents and purposes* was the mayor of the city.

b. I asked what Leslie said that *in her opinion* had made Robin give a book to Lee.

c. Lee forgot which dishes Leslie had said that *under normal circumstances* should be put on the table.

(4)a. *Robin met the man Leslie said that was the mayor of this town.

b. *I asked what Leslie said that had made Robin give a book to Lee.

c. *Lee forgot which dishes Leslie had said that should be put on the table.

(4)は、通常の *that-t* 効果を示しており、Rizzi(2006)の Subject Criterion により、その非文法性を、(1a,2a)と同様に、説明できるが、副詞類効果を示している(3)の文法性を全く説明できない。なぜなら、補文標識 *that* が存在し、さらに副詞類が主語の前に位置している。したがって、彼の言う CP+SubjP 削除なるものは、不可能としか考えられないし、Critical Position から移動が生じているのであるから、非文法的と誤って予測されてしまう。

以上まとめると、主語からの移動の場合、補文標識 *that* の存在有無に関しても、副詞類効果に関しても十分な説明がつかない。

1.2. Pesetsky&Torrego(2001)

Pesetsky&Torrego(2001)は、次の(9)、(10)、(11)、(12)を仮定し、さらに補文標識 *that* は、C ではなく、T に生起し、T から C へ移動した実例であるとして、(1)の主語と目的語の非対称性を説明している。

(9) Economy Condition

A head H triggers the minimum number of operations necessary to satisfy the properties (including EPP) of its uninterpretable features.

(10) Motivation for T-to-C movement

C bears an uninterpretable T-feature (henceforth uT) with the EPP property.

(11) The nature of nominative case

Nominative case is uT on D.

(12) Attract Closest X (ACX)

If a head K attracts X, no constituent Y is closer to K than X.

(1)a. *Who do you think thatt will come?

b. Who do you think that Mary will meet t?

まず、(1b)の目的語が移動した場合を見てみよう。(1b)の従節は概略次のようになる。

(13) [CP t_[who, -wh] [T that]_j+[C, uWh, uT][TP Mary will_j meet t_i]]

連続循環 wh 移動する場合、C には、(10)により、[uWh, uT]の素性を持つと考えられるが、C の[uT]は、T から C への補文標識 *that* の移動、

C の[uWh]は、wh 移動により、それぞれ削除される。一方、(1a)の従節では、次の(14)のように、主格主語が wh 移動を起こしている。

(14) [CP t_[who, +Wh, uT] [T that]_j+[C, uWhuT] [TP t_iwill_j buy the book]]

ここでの wh 移動は、主格主語からの移動であるので、移動した *who* には、(13)の目的語からの移動とは異なり、(11)により、[uWh, uT]の素性を持ち、その移動のみで、C が持つ二つの素性[uWh, uT]を同時に削除することができる。しかしながら、この場合、補文標識 *that* が T から C へ移動しているので、(9)の経済性の原理から、*that* の移動という不必要な操作が加わっている。²

このように、従来の ECP のようなフィルターを介さずに、経済性の原理という非常にシンプルな分析を行っているが、問題となっている副詞類効果と話題化島について、彼らの枠組みで見えていこう。

従節に話題化された構成素または副詞類が節の先頭に現れると、次のように、補文標識 *that* が生じないと容認性が下がる。

(15)a. Mary is claiming *that* for all intents and purposes John is
 themayor of the city.

b.??Mary is claiming for all intents and purposes John is the mayor of
 the city.

(16)a. Mary knows *that* books like this Sue will enjoy reading.

b.??Mary knows books like this Sue will enjoy.

彼らは、(17)のように、前置された副詞類も話題化された構成素も主格主語よりも上の TP に支配された指定部にあると仮定している。

(17) [C, uT][_{TP} topic [_T subject [_T T.....]]]

上の構造では、主格主語と C の間には、topic が介在し、(12)の ACX により、主格主語が C へ移動し、C の[uT]を削除することができない。それゆえ T から C への補文標識 *that* の移動が義務的になると述べている。しかしながら、この枠組みで行くと、下の(18)の副詞類効果と(19)の話題化島は、両者とも同じ構造を持つことになり、wh 移動に関しての違いを全く説明できない。

(18) Who did Leslie say that, for all intents and purposes, was the mayor of the city?

(19) *Who did Robin say that, this present, gave Lee?

2. Browning(1996)

Browning(1996)では、主語移動によって生じた痕跡に対して GB 時代の ECP に基づいた認可条件を認め、Watanabe(1992)の CP 繰り返し、Cheng(1991)の節のタイピング、短距離移動に組み込まれている Chomsky(1993)の等距離等を仮定している。CP の繰り返し、節のタイピング等は、概略、次のようなものである。

(20)CP recursion

If a non-wh clause has, at some point in the derivation, a filled specifier, then the complementizer must move to create another level of CP structure without a specifier.

(21) clause typing

- a. A wh clause has a wh-phrase in its specifier.
- b. A non-wh clause has no specifier at all.

(22) If α, β are in the same minimal domain, they are equidistant from γ .

非 wh 節の CP に指定部がある場合、補文標識 *that* が移動し、指定部を持たない新しい CP が形成されるというのが Browning の主要な主張である。

では、まず、副詞類効果の例を見るが、前節の(18)は、概略、次の(22)の構造になる。

(18) Who did Leslie say that, for all intents and purposes, was the mayor of the city?

(23) $[_{CP_1} who_i [_{C-C_i} [_{IP} Leslie \text{ say } [_{CP_2} t_i' [_{C'} that_C [_{CP_3} \text{ for all intents and purposes } [_{C'} tC/i [_{IP} t_i \text{ was the mayor of the city}]]]]]]]$

(18)の *say* の従節は、非 wh 節であるので、その CP 指定部が占められていてはならない。(18)を分析した(22)では、従節の CP3 の指定部が副詞類によって占められている。したがって、(20)により、指定部が占められている CP3 の主要部である補文標識 *that* が移動し、指定部を持たない CP2 を形成する。この移動により、連鎖(*that_C*, *tC/i*)が形成される。さらに、wh 移動で生じた中間痕跡 *t_i'*と移動した *that* が CP2 内部で指定部・主要部の一致関係にあり、その一致関係は、最終的には、*that* の移動で生じた連鎖のメンバーと wh 移動で生じた連鎖のメンバーが同じ指標を持つことになり、*that* の痕跡 *tC/i* が、wh 移動で生

じた主語痕跡 t_i と一致する。したがって、 tC_i が t_i を認可すると説明する。³

また、次の話題化島(19)と上の(18)のような副詞類効果の違いは、話題化の場合、話題化される要素は、 $C[+top]$ との照合関係で CP 指定部へ移動し、(24)のように異なる補文標識、つまり $[+dec]$ の素性を持つものと $[+top]$ の素性を持つ C を主要部にした CP が二つ形成されていると分析している。

(19) *Who did Robin say that, this present, gave Lee?

(24) $[_{CP1} who_i [_{IP} Robin say [_{CP2} t'_j [that [_{CP3} this present_i [C' C[+top] [_{IP} t_j gavet_i Lee]]]]]]]$

(24)において、*this present* は、CP3 の主要部 $C[+top]$ の素性照合のため CP3 の指定部へ動いていくが、この場合、(23)の副詞類効果の場合とは異なり、補文標識 *that* の移動は無く、CP2 と CP3 は、全く異なるものであるとしている。つまり、CP3 の主要部 C は、 $[+top]$ 素性を持ち、CP2 の主要部には $[+dec]$ 補文標識 *that* が占められているが、その補文標識 *that* は CP3 の主要部から CP2 の主要部へ移動したのではないと考えている。上の例では、補文標識 *that* と *wh* 移動で生じた中間痕跡 t_j は、CP2 内部で指定部・主要部の一致関係に確かにあるが、補文標識 *that* が CP3 の主要部から CP2 の主要部へ移動したものではないので、(18)のような副詞類効果の場合とは異なり、主語痕跡 t_i を認可するものがない。さらに、補文標識 *that* の移動が生じていないため、CP3 の指定部と CP2 の指定部が、(22)の等距離とはならないので、 t_j から中間痕跡 t'_j の移動が、*this present* _{t_i} の介在のため、短距離移動の違反が生じていると説明している。⁴

以上、**Browning** の枠組みをまとめると、話題化された構成素がある場合、従節は、次の(25)のように、**[+top]**素性を持った CP と**[+dec]**素性を持った CP という異なる CP 構造を持ち、一方、副詞類効果の場合では、(26)の構造のように、補文標識 *that* の移動による CP 繰り返しがあるとしている。(25) のように話題化構造の場合、C**[+top]**は、素性の照合のため指定部に話題化される要素を移動により要求するので、**[+top]**の素性を持つものと**[+dec]**の素性を持つ異なる 2 つの CP 構造を形成すると考えている。一方、副詞類効果の(26)では、下側の CP の指定部に副詞類が現れているが、話題化構造とは異なり、C の素性照合が関わって副詞類が指定部に移動したわけではなく、単に、併合により導入されたとしている。この状態だと非 *wh* 節の CP 指定部が副詞類によって占められているので、補文標識 *that* が移動することにより、指定部を持たない CP が新たに作られるというものである。

(25) $Op_i[Cp_t' [C: that[+dec] [CpTopic_i [C: C[+top] [Ip_t]_t]]]]]$

(26) $Op_i[Cp_t' [C: that_j [CpAdv [C: t_j [Ip_t]]]]]]]$

以下、この構造が基本的に正しいものとして考察していくが、**Browning** では、*wh* 移動で生じた主語痕跡に対し、指定部・主要部一致を用いた指標を使い、従来の ECP に基づいた説明をしている。この点に関して、前節で見てきた **P&T** の T から C への移動を採用し、さらに、**Browning** が示唆するように、標識 *that* には、T 素性だけではなく、**[+dec]**素性も存在すると仮定し、**GB** の枠組みで仮定されていた ECP という一種のフィルターに基づいた説明を回避し、ミニマリストの枠組で、問題点を解消していく。

3. 解決案

まず次の例文を見てみよう。**Browning** は、否定副詞類も、通常の副詞類同様に、副詞類効果を示すと述べている。

- (27)a. Leslie is the person who said that *at no time* would run for any public office.
- b. Robin met the man who Leslie said that *only then* had seen anything moving.
- c. It is Leslie who I believe that no even for one moment had given a damn about the budget.

上のように主語が移動した場合、主語・助動詞の倒置があるかどうか明らかではないが、

次の例文のように主語が移動していない場合、倒置が行われる。

- (28)a. Robin was convinced that at no time *would Leslie* run for public office.
- b. Lee thought that only then *did Leslie* see anything moving.
- c. Robin knew that not even for one moment *had Leslie* given a damn about the budget.

否定副詞類が現生じた場合、倒置が行われること、否定副詞類も通常の副詞類と同様に副詞類効果が出てくることから、**Browning** の(26)を(29)のように修正する。

(29) $Op_i V$ [CP_1 $t_{[Op, uWh]_i}$ [T $that$] $_j$]+[C , uWh , $uDee$] [$CP_2 Adv$ [T $that$] $_j$]+[C , uT]

| _____ | | _____

[TP $t_{[Op]_i} T$] $_j$

_____ |

主語・助動詞の倒置があることから、副詞類が生じている CP_2 の主要部 C には T 素性があると考えられる。したがって、 CP_2 の T 素性を照合するために、補文標識 *that* が TP 主要部 T から CP_2 主要部へ移動する。さらに、主節動詞 V との選択関係で、 CP_1 は[dec]素性を持つと考えられるので、 CP_2 の主要部へ繰り上がった *that* は、さらに CP_1 の主要部へと繰り上がる。その結果、 CP_1 の持つ[dec]素性は照合され、また、*that* の移動により、 TP 主語位置から、 CP_1 指定部への移動が可能となる。

次に非文法的な話題化島について考えてみよう。話題化の場合、次に示すように、[top]素性を持つ C には、 T 素性が無いと思われる。なぜなら、もし[top]素性を持つ C に T 素性があるとするならば、(30)は、概略、(31)の構造を持ち、助動詞 *will* $_j$ は、 CP_2 の主要部を経由し、 CP_1 への主要部への移動が可能となり、誤って、(30)を文法的と予測してしまう。一方、[top]素性を持つ C に T 素性が無いと仮定すると、下の(31)では、*will* $_j$ が、 CP_2 の主要部を経由できず、 TP 主要部から、 CP_1 主要部への移動と考えられ、 HMC^6 の違反と簡単に説明できる。

(30)*Never again will beans I eat.

(31) [CP_1 never again [C -will] $_j$ [CP_2 beans $_i$ [C ' t_j '+[top] [TP I t_j eat t_i]]]]

このことから、副詞類効果の場合と異なり、[top]素性を持つ C 主要部には T 素性が無く、T から[top]素性を持つ C への移動は、経済性の原理から存在しないと考えられる。その結果、次の(32)のように、[top]素性を持つ C への *that* の移動が無いので、[top]素性を持つ CP と主節動詞との選択関係で生じた[dec]素性を持つ CP とい二重の異なる CP が、Browning が主張するように、形成されると考えられる。

- (32) V [CP₁ [C' *that*+ [C, uWh, uDec] [CP₂Topic_j [C' C[top] [TPOp.....t_j.....

この構造において、CP₁ の指定部の素性[uDec]は、補文標識 *that* の挿入により、削除されるが、この *that* は、(29)の副詞類効果のように T 主要部から CP₂ の主要部を経由して移動したものではない。また CP₂ 指定部に話題化された構成素が、TP 内部に存在する Op とその中継地点である CP₁ 指定部に介在している。したがって、TP の主語位置から CP₁ 指定部への移動が不可能となり、話題化された構成素が存在する従節からの移動ができないと説明できる。⁵

4. 結語

以上副詞類効果を見てきたが、通常の副詞類と否定の副詞類を同等と見なし、話題化島との違を、補文標識 *that* が、T から C へ、さらに次の C へ移動することができるかどうかで、説明してきた。

しかしながら、Rizzi(1997)では、概略次のような左辺周辺部構造を仮定し、否定副詞類は、Foc の指定部、副詞類及び話題化要素は Top の指定部に位置していると考えている。

- (33) ...that_[FocP] only in that election Foc [FinP_{t_i} Fin+Agr_i [TP_{t_i}

(34) ...that_{[TopP next year Top [FinP t_i' Fin+Agr_i [TP t_i}

(35) ...that_{[TopP this book Top [FinP Op Fin [TP t_i}

(33)が否定副詞類、(34)が副詞類、(35)が項の話題化を、それぞれ、含み、従節主語が移動した場合である。まず、非文法性が生じない(33)と(34)の場合、Fin+AGR_iが t_iを認可し、その Fin+Agr_i がさらに、図のように、FocP 主要部または TopP 主要部へ移動し、その位置で t_i'を認可するという、ECP に基づいた説明を行っている。一方、(35)では、話題化の場合、弱交差現象が見られないことから、話題化の空演算子 Op を FinP 指定部に仮定している。この場合、Fin に Agr 素性があるとしても、空演算子 Op と一致してしまうので、Fin が t_iを認可することができないと述べている。

このように、Rizzi(1997)では、ECP に基づいた説明をしているので、本稿では、扱わなかったが、通常の副詞類と否定副詞類の位置の違いについては、今後、考察していく必要がある。

注

本研究は平成 25 年度宮崎公立大学理事長・学長研究助成事業の援助を受けている。

1. Chomsky(1986)等参照のこと。
2. Pesetsky&Torrego(2001)では、(i)のように補文標識 *that* が存在しない場合、主語が CP へ繰り上がり、C の持つ[uF]を消去すると考えている。

(i)a. Who do you think *t* will come?

b. Who do you think Mary will meet *t*?

(ii)a. $Wh_i \dots [_{CP} t_i'] [C, uWh, uF] [_{TP} t_i \dots \dots]$

b. $Wh_i [_{CP} t_i'] [Mary, uF] [C, uWh, uF] [_{TP} t_i \dots \dots t_i \dots]$

主語からの移動を表したのが(ii)a)であるが、 t_i から t_i' の移動により、C の $[uWh, uF]$ が一度に消去される。一方、目的語からの移動である(ii)b)では、主語 *Mary* の移動により C の $[uF]$ が、また t_i から t_i' の移動により C の $[uF]$ が、それぞれ、消去されるとしている。

3. Boskovic(2011)も Watanabe(1992)の CP 繰り返しを用いて、副詞類効果を説明している。ただし、Boskovic は、*that*-*t* 効果のような場合、Browning とは異なり、補文標識 *that* が局所性違反に関わっていると考えている。副詞類効果の場合、次のような構造を持ち、*who* の移動により *表示された *that* が CP2 から CP1 へ繰り上がる。その後、コピー削除が行われ、*表示された要素は存在せず、文法性を正しく予測すると主張している。

(i) Robin met the man who_j Leslie said $[_{CP} that_i [_{CP} \text{for all intents and purposes } who_j that_i^* [_{IP} who_j \text{ was the mayor of the city}]]]$

4. 本稿(24)において、 $[+top]$ 素性を持った C が投射され CP 構造が形成されるがその CP 構造に $[+dec]$ 素性を持つ C が併合され、二つの異なる CP 構造が形成され、結果的に、副詞類効果の場合とは異なり、上位の CP 指定部と下位の CP 指定部は、C-C 移動が生じたわけではないので、等距離とはならない。
5. Pesetsky&Torrego(2001)によると、C には T 素性があることになるが、話題化された構成素がある場合、Rizzi(1997)に従い、*force-finite* が二つに分かれ、TopP をはさむと仮定する。そうすると、話題化された構成を含む従節は、次のような構造になる。

(i) [_{ForceP}(=CP1) *that* [_{TopP}(=CP2) *topic*_i [_{FinP}(=CP3) [_{NomSubject} *uF*]_j [_C *uF*]
 [_{TP} *t_j*.....*t_i*]

TPの主語がCP3へ繰り上がることにより、CP3の主要部のT素性を削除する。また、CP3へ繰り上がった構成素がOpであったとしても、CP2の指定部には、話題化された構成素があり、さらに、補文標識 *that* は、副詞類効果の場合と異なり、移動してCP1を占めているわけではない。したがって、CP3の指定部からCP1の指定部へのOpの移動は不可能となる。

参考文献

- Boskovic, Z. (2011) 'Rescue by PF Deletion, Traces as (Non)interveners, and the That-Trace Effect', *Linguistic Inquiry* 42: 1-44.
- Browning, M. A. (1996) 'CP Recursion and *that-t* Effects', *Linguistic Inquiry* 27: 237-255.
- Cheng, L. (1991) *On the typology of wh-questions*, PhD diss., MIT.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1996) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, N. (1993) 'A minimalist program for linguistic theory', in K. Hale and S. J. Keyser (eds.), *The View from Building 20*, MIT Press, Cambridge, Mass. pp.1-52.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky N. (2001) 'Derivation by Phase', in M.Kenstowicz (ed.), *Ken*

- Hale: A Life in Language*, pp1-52. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Pesetsky, D. and Torrego, E. (2001) 'T-toC movement: cases and consequences', in M. Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, pp355-426. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Rizzi, L. (1997) 'The fine structure of the Left periphery', in L. Haegeman (ed.), *Elements of Grammar*, pp281-337. Kluwer, Dordrecht.
- Rizzi, L. (2006) 'On the Form of Chains: Criterial Positions and ECP Effects', in L. Cheng and N. Corver (eds.), *WH-Movement: Moving On*, pp97-133. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Travis, L. (1984) *Parameters and Effects of Word Order Variations*, PhD diss., MIT.
- Watanabe, A. (1992) 'Larsonian CP recursion, factive complements, and selection', in *NELS 23*, vol. 2, pp523-537. GLSA, University of Massachusetts, Amherst.

On the Status of Subject in the Non-finite Clause

Kazukuni Sado

Synopsis

This study aims to confirm that Subjects in non-finite clauses properly have the status of Subject. Citing examples of finite clauses, we observe the syntactic probe of Subject. After the overview of mood and modality, we acknowledge that Subject is purely an interpersonal concept. We adopt Halliday's view that Subject is an item which carries modal responsibility. The examples of non-finite participle clauses show that the nominal groups in the examples carry modal responsibility just as Subjects in finite clauses do.

0. Introduction

We often encounter examples of non-finite clauses whose participles are preceded by a certain kind of nominal group. The aim of this study is to reconsider if it is appropriate to regard nominal groups such as in (1) and (2) as Subjects.

(1) God helping me, I will not let you down. (Ford)¹

(2) A little boy went past us, his scarf dragging behind him on the pavement. Declerck(1991:462)

Let us review the characteristics of the non-finite clauses from Biber et al(1999:198). Their explanation is that “they are not marked for tense or modality, and they frequently lack an explicit subject and subordinator.” We can see from their words that Biber et al do not exclude the existence of Subject. Declerk also considers “his scarf” in (2) as a Subject in his “absolute participle clause”. However, as the use of technical terms in systemic functional grammar differs considerably from other schools of linguistics, it is necessary for us to review what “Subject” means in systemic functional grammar.

1. Realizations of the Subject

An important question we cannot avoid asking is what kind grammatical elements realize the Subject. See an example from Bloor and Bloor(2004:262) and Eggnis(2004:217).

(3) Neurotoxins will kill the insects.

(4) She carried the bomb on to the plane.

The noun Neurotoxins fills the Subject position in (3), and we can observe that pronouns also fill the same position in (4). We can note that some pronouns are exclusively for the positions of the Subject. The typical element for the Subject is the nominal group but there are some kinds of pronoun that we need to be careful of. These are widely known as “dummy Subjects”.

(5) [...]it was a mystery why some nerves stimulate an organ and others

depress it.

As Bloor and Bloor(2004:42) note, the first “it” in (5) does not mean anything, but the real Subject is the embedded clause “why some nerves stimulate an organ and others depress it” Rather the pronoun in question “is a stand-in, holding the subject position until the meat of the Subject comes along”. Pronouns are not the only dummy Subject. Another example of dummy Subject is an existential *there*, which “functions as a grammatical subject rather than an adverbial. See Biber et al’s(1999:944) example below.

(6)There’s more gravy here.

Regardless of etymology it should be safer to regard existential *there* as a kind of pronoun as they function like those in (5).

In addition to the nominal group, Halliday and Mathiessen(2004:155) show examples where the clause fills the Subject position.

(7)*That all this wealth might some day be hers* had simply never occurred to her.

(8)*Ignoring the problem* won’t make it go away.

(9)*To argue with the captain* was asking for trouble.

In all these examples the whole clauses are embedded. The embedded clause in (7) is finite while those in (8) and (9) are non-finite. As they note, these embedded clause subjects are pushed to the end of the clause and the

pronoun *it* fills the position as we have seen the example (5) above. Therefore, grammatical items that function as Subjects are nouns, pronouns, and clauses.

2. How to identify Subject

As with many other terminologies in systemic linguistics, what “Subject” means may quite differ from the works of other school of grammarians. Before going into the discussion on the definition, let us consider what kind of clues we can exploit in identifying Subject in the clause. Bloor and Bloor(2004:28) suggests four ways to find Subjects in English clauses.

The most obvious cases that they note are forms of the pronouns. Pronouns “I, you, he, she, it, we, they” occur at the positions of the Subject. They also note that “mine, yours, his, hers, its, ours” may also fill the Subject slot.

Another clue is the form of the finite verb. “be” is the typical case of such verbs. Most of other verbs add –s in the third person singular in the present tense. In many cases, however, the forms of the finite verbs cannot be employed as a clue. Verbs in past tense do not show the person and the number.

Two better probes they recommend are the question and the tag question. We can identify what element is the Subject when we convert a declarative to an yes-no question. See their examples.

(10)Erosion depletes the grasslands.

(11)Does erosion deplete the grasslands?

The only difference between the two examples above, ignoring the punctuation, is the order of the finite verb and the noun. They point out that “the Subject is the nominal group which immediately follows the finite operator in the interrogative”. This probe shows that the Subject in (10) is “Erosion”. Note their another example below.

(12)Erosion depletes the grasslands, doesn't it?

If we pay attention to the tag in (12), we can see that Finite is followed by a pronoun, which refers to “Erosion”. As “the Subject of the main clause is reflected in the tag”, we can conclude that “Erosion” is the Subject in (10). These four ways help to locate Subjects without any preconception, although these methods do not work on non-finite clauses.

3. Mood structure and its system

3.1 Mood structure

As we have repeatedly noted, the uses of the term “Subject” in systemic functional grammar should not be confused with those of writers who adopt different approach. This is especially because our approach recognizes that an linguistic expression has three meanings or metafunctions: Interpersonal, Textual and Ideational. Bloor and Bloor(2004) give concise definitions of these three metafunctions. Ideational metafunction is further divided into two: experiential and logical. The Interpersonal metafunction concerns the interactional aspect of

language, the speaker-hearer dimension such as Mood and modality. The Textual metafunction, according to Halliday and Mathiessen's (2014:30-31), builds up sequences of discourse, organizing the discursive flow and creating the continuity as it moves along. The Ideational metafunction subdivides into the experiential and logical metafunctions. The experiential has to do with conceptual content, the representation of 'goings on' in the world. The logical metafunction has to do with semantic relations between experiential elements. A Subject is a term in Interpersonal meaning. From an Interpersonal point of view, the clause is made up of two parts: Mood and Residue. See an example from Bloor and Bloor (2004:44).

(13)	he	has	written	the letter
	Subject	Finite	Predicator	Complement
	Mood		Residue	

Mood is a part of the clause in Interpersonal structure that shows the mood choice of the whole clause. It is made up of Subject and Finite. Residue is literally the rest of the clause. However, in many instances, the same one verb is a Finite and Predicator. In other words, Finite and Predicator are merged.

(14)	He	picked up	ideas	from his teachers.
	Subject	Finite	Predicator	Complement
	Mood		Residue	Adjunct

This example from Thompson(2004:258) shows that the verb “picked up” is both Finite and Predicator. The border between the Finite and the Residue has nothing to do with syntactic unit in this case.

3.2 Mood system

The role of the Mood is “making choices from the MOOD system network”. (Bloor and Bloor(2004:46)) Thompson(2004:46) explains that “the most fundamental purposes in any exchange are of course, giving (and taking) or demanding (and being given) a commodity of some kind”. He further states that this commodity is either information or non-verbal action. The non-verbal action is, in Halliday and Mathiessen’s(2004:108) terms, “goods-and-service”. If we analyze an exchange from two dimensions, that is giving vs. demanding, and the commodities, that is, information vs. goods-and-service, four basic speech roles can be recognized: statement, question, offer and command.

(15)We’re nearly there.

(16)Is this the place?

(17)I’ll show you the way.

(18)Give me your hand.

As Thompson’s(2004:47) figure shows, (15) is a statement that gives information, (16) is a question that demands information, while (17) is an offer that gives goods-and-service and (18) is a command that demands goods-and-service.

The figure below from Bloor and Bloor(2004:47) is the MOOD system

network employed in the expressions in (15) - (18) above.

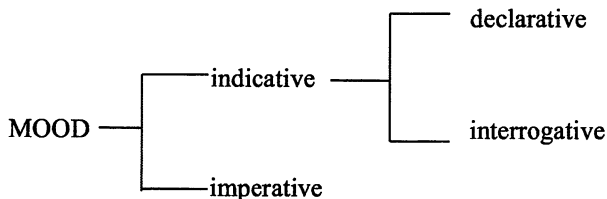


Fig.1

According to Halliday and Mathiessen(2004:114), “the presence of the Mood element, consisting of Subject plus Finite, realize the feature indicative”. On the other hand, in imperative clauses, as Thompson(2004:56) notes, “the unmarked form has no Mood” and “the Subject of the command (the person responsible for carrying it out) is not specified, since it can only be the addressee (‘you’)”.

The choice of indicative leads to another choice between declarative and interrogative. Here again, Subject and Finite plays an important role. Halliday and Mathiessen(2004:115) explain this in detail.

Within the indicative, what is significant is the order of Subject and Finite.

- (a) the order Subject before Finite realizes ‘declarative’
- (b) the order Finite before Subject realizes ‘yes/no interrogative’
- (c) in a ‘WH-interrogative’ the order is (i) Subject before Finite if the WH-element is the Subject; (ii) Finite before Subject otherwise

As we can see, the unmarked statement is realized by a declarative clause, while the unmarked question is the interrogative clause.

It seems necessary at this point to review what markedness means. Markedness is a marked / unmarked opposition, and it can be defined by several aspects. The most literal characterization of this concept is presence or absence of extra morpho-syntactic elements. At word level, past tense and plural are “marked” by extra elements. On the other hand, negative clauses are marked because “not” is an extra element compared to positive ones. Another characteristics of marked element or structure is that they are often infrequent compared to unmarked ones. The infrequent occurrence in certain context gives rise to implicatures. The unmarked ones are, on the other hand, frequent and they are , as Crystal(1991:211) defines, “neutral” in their meanings. For instance, a declarative question is a marked choice, and its implicature is that the speaker is aware and confident of the polarity and seeks confirmation from the hearer. Although markedness is an important concept for our study, it would carry us too far from the purpose of our present study to pursue this point any further. Let us turn to the issue of polarity.

3.3 Polarity

Another important choices made in the Mood is the polarity. See another system network from Bloor and Bloor(2004:47)

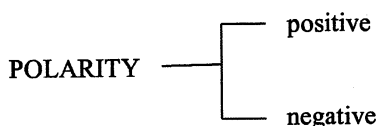


Fig.2

As is evident from this system network, a polarity is a choice between positive and negative. Halliday and Mathiessen(2004:143) note, although the positive clause is unmarked, “choosing positive is just as substantive and meaningful as choosing negative”. We shall return to this point later when we discuss some examples of non-finite clauses.

4. Modality

It is often the case that polarity is not clearly either positive or negative. There are cases of, in Halliday and Mathiessen’s (2004:143) terms, “the region of uncertainty”, or in Thompson(2004:66) words, “intermediate stages” between ‘yes’ and ‘no’”. If the commodity is information, the clause expresses the proposition. Modality in proposition is called the modalization. The clause is said to express proposal when the goods-and-services is negotiated. Modality in this case is called modulation. Let us now see the system network of modality from Thompson(2004:67)

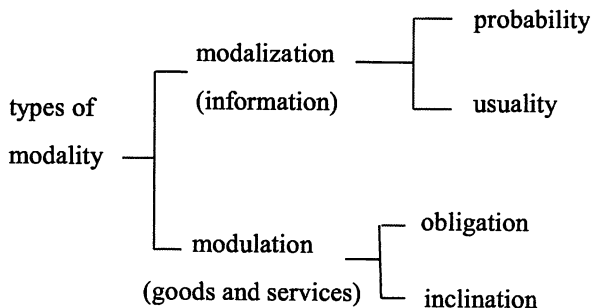


Fig.3

We can observe from this figure that further choices are made after modalization or modulation. Let us have an overview of modality although there is no need to go into detail in this study. The speaker can show confidence of the proposition by such expressions as possible / probable / certain, or frequency by sometimes / often / always. The former is classified as probability and the latter usuality. The choice between obligation and inclination corresponds to the choice between command and offer. In command, the speaker lay obligation on the addressee, while in offer s/he can express “the degree of willingness or inclination”.

5. The role of Subject

Halliday and Mathiessen's(2004:119) definition of the Subject that is common to all the mood and speech role is, “that which carries the modal responsibility”. This definition may seem too vague at first, but it becomes clearer when we see examples of the each speech role. When the goods & services are negotiated, “Subject specifies the one that is actually responsible for realizing the offer or command”. The unmarked clause type for command is imperative, which usually lacks the Subject. See the example (18) above again.

(18) Give me your hand.

In imperatives, it is natural to regard the addressee as the potential Subject. In this case addressee or “you” is responsible for the success of the action. Halliday(1985:273) also notes that “the Subject expresses the participant in

respect of which the particular speech function is validated". It is obvious that the unmentioned "you" validates the command. Note that offer is often realized by declaratives, which normally have Subject. We have already seen it in example (17) above.

(17) I'll show you the way.

This clause has an explicit Subject "I", which obviously carries the modal responsibility of the proposal.

What about, then, when the information is negotiated? In such cases, in Halliday and Mathiessen's (2004:117) words, it is "something by reference to which the proposition can be affirmed or denied". Let us again go back to the example that we have already seen.

(15) We're nearly there.

Being nearly there can be affirmed or denied by reference to "we" in this case. It is a matter of "We".

Thompson (2004:52-53) proves the point by taking examples whose Subject is a Goal in a passive clause. He notes that in the negative response in (20), the Subject remains the same but the proposition or the claim will be changed if the Subject is changed as in (21).

(19) She was sacked last week by Nat West.

(20) No she wasn't.

(21) No, Nat West didn't sack her, Barclays did.

Here the validity of the proposition depends on “she” the person who was sacked, not on “Nat West” although she is also a participant in the proposition. Even if it wasn’t Nat West that sacked her, the truth value of this proposition is not denied. What is most important is her being sacked, and the truth value of this fact which is challenged in (20), whereas in (21), the speaker does not deny her being sacked per se, but who did it. In Thompson’s words, “the exchange has moved to a new proposition, which represents a new claim”.

6. Subject and Actor

We have already seen that Subject is an Interpersonal element and should be treated separate from Ideational and Textual perspective. This is why analysts find the term “doer” inappropriate definition of the Subject in many cases. See that example (22) from Bloor and Bloor(2004:112) is analyzed from both Ideational and Interpersonal perspective.

(22) Jerry	opened	the door.
Actor	Process:material	Goal
Subject	Finite/Predicator	Complement

Here, the Subject is an Actor, a kind of doer.

However, in the following passive clause the Subject is a Goal, and the Actor is an Adjunct.

(23)	The door	was	opened	by Jerry
	Goal		Process:material	Actor
	Subject	Finite	Predicator	Complement

The example of a clause below is active, but the Subject is not an Actor, but a Senser.

(24)	I	knew	the number.
	Senser	Process:mental	Phenomenon
	Subject	Finite/Predicator	Complement

In this case the Process is mental and a “doer” is hardly the definition. The same goes for some cases of material process, as Halliday(1985:230) suggests.

7. Subject and Theme

The clause from a textual perspective is divided into two parts: Theme and Rheme. Halliday and Mathiessen's(2004:64) definition is that “The Theme is the element which serves as the point of departure of the message: it is that which locates and orients the clause within its context”. What element should be the unmarked or typical Theme of the clause depends on the mood of the clause: declarative, interrogative, and imperative. For declarative clauses, the unmarked Theme is the Subject. However, to consider the relationship between Subject and Theme, see examples of topicalization or left dislocation.

(25) Such a blunder I had now committed. (Biber et al(1999:900))

(26) That money I gave her. (Huddleston and Pullum(2002:1366))

In both (25) and (26) above the Subject is “I” because that is the element on which the validity of the proposition depends. The topicalized items “Such a blunder” and “That money” serve as Themes of each clause, but do not carry the modal responsibility as the participant “I” does. These examples show that Subject is not always the Theme of the clause although it is the unmarked theme of the declarative clause.

It has so far been clear that Subject, Actor and Theme are separate concepts although the nominal group often carries the three functions at the same time. Actor is an Ideational element while Theme is a Textual element. In systemic functional grammar, at least, Subject is purely an Interpersonal item. We need therefore discuss if a certain item is Subject or not only from Interpersonal perspective.

8. Subject in non-finite clause

Having seen examples of Subjects in finite clauses we can now turn to those in non-finite ones. The examples below are all from the news paper The Japan Times².

(27) *With the Upper House election approaching in July, Abe this time around seems to be focusing on economic issues first by appointing most of his close aides and party heavyweights to the economic and financial posts. (Dec. 27, 2012)*

(28) *With the final round of the bid for the 2020 Summer Olympics kicking*

off, top politicians and athletes vowed Tuesday to win the competition to bring the games to Tokyo. (Jan. 9, 2013)

(29) The cathedral-like terminal, *with its vaulted ceiling depicting the constellations*, is one of America's most popular tourist destinations and one of New York City's most recognizable buildings (Feb 2, 2013)

(30) Thailand and the Philippines were ranked the highest, *with women holding 39 percent of senior level positions*, while India came in at 14 percent and China 25 percent, the report said. (April 20, 2012)

(31) He said the tensions could be short-lived, *with the next South Korean president again seeking a fresh start with Japan*. (Aug. 7, 2012)

(32) The development came within hours of U.S. President Barack Obama's re-election, *with allies anticipating a new, bolder approach from him to end the deadlocked civil war*, which has killed more than 36,000 people since the uprising began in March 2011. (Nov. 13, 2012)

In all these clause complexes, the participle clauses are introduced by preposition "with". The nominal group follows this preposition and precedes the gerund-participle. We can observe that "the Upper House election", "the final round of the bid for the 2020 Summer Olympics", "its vaulted ceiling", "women", "the next South Korean president", "allies" are all Subjects in each non-finite clause. Let us also see examples of past-participle clauses.

(33) Andy Murray stood *with the Union Jack draped over shoulders*, an Olympic gold medal around his neck, next to the man he had just beaten,

Roger Feder, and basking in the roar of the Centre Court crowd.

(Aug. 7, 2012)

(34) Since 2001, about 280,000 American women served in Iraq and Afghanistan about 12 percent of all troops who developed, *with 144 female troops killed in the wars*, including 79 in combat, according to the Pentagon. (Feb. 11, 2012)

(35) Tokyo estimates a budget of around ¥7.5 billion for the bid, *with 51 percent financed by the private sector and the rest by the Tokyo Metropolitan Government*. (May 25, 2012)

Like examples of gerund-participle clauses in (27) - (32) above, they are introduced by preposition “with”. The nominal groups “the Union Jack”, and “144 female troops” and “51 percent” precede the past participle. The voice of these non-finite clauses are all passive³.

Regardless of the voice, Subjects in (27) - (35) carry the modal responsibility just as those in finite clause do. In other words, the validity of the proposition depends on these nominal groups. Some Subjects are long nominal groups as in (28). Just to prove non-finite clauses are as informative as finite ones, see (36) and (37) below.

(36) Reactions to the death of Venezuelan President Hugo Chavez were as mixed, polemical and outsize as the leader was in life, *with some saying his passing was a tragic loss and others calling it an opportunity for Venezuela to escape his long shadow*. (Mar. 7, 2013)

(37) Western efforts to oust Syrian President Bashar Assad shifted dramatically Wednesday, *with Britain announcing it will deal directly with*

rebel military leaders and Turkey saying NATO members have discussed using Patriot missiles to protect inside Syria. (Nov.13, 2012)

Here again the clause is introduced by a preposition. The Predicators in these clauses express verbal process. It is interesting to see that finite clauses are projected by the participle, and since they are indirect speech, they are dependent on the non-finite clause. It is rare for a finite clause to depend on a non-finite one. To pursue this point any further would carry us too far away from the purpose of this paper. What we want to emphasize here is that non-finite clauses can be so informative that the Predicator can project another clause. It is natural to regard these clauses as declarative with positive polarity. Halliday and Mathiessen(2004:143) note that “it would be wrong to think of positive as simply the absence of negative feature”. As we have already seen above, positive polarity is not simply a default which happen to lack negation but a meaningful choice.

Non-finite clause in negative polarity is by no means scarce. The examples below have participle clauses in negative.

(38)*Not choosing sacrifice for its own sake*, but for our own sake, we must provide for our nation the way a family provides for its children

(Clinton)

(39)*Not wishing to get involved in with the police*, I left the pub immediately after the fight started (Declerck(1991:456))

(40)The constable, *not knowing who had started the fight*, ordered everybody to accompany him to the police station. (ibid)

In all these examples, negative words precede the Predicators. Negation is possible even when these clauses have Subjects.

(41) *The children not wanting to leave the beach*, their mother decided to stay a little longer. (Frank(1972:305))

(42) *No further point being raised*, the chairman declared the meeting closed. (Declerck(1991:460))

(43) The solutions we seek must be equitable, *with no one group singled out to pay a higher price*. (Reagan)

(44) Well, this administration's objective will be a healthy, vigorous, growing economy that provides equal opportunity for all Americans, *with no barriers born of bigotry or discrimination*. (ibid)

(41) is given in Frank(1972:305) as an example of “Absolute construction”, a subtype of the verbal construction. Along with her Participial phrase, Gerund phrase, Infinitive phrase, she shows that “all verbal constructions are made negative by the use of *not* (my emphasis) before the verbs”. Cases like this seem rare compared to the examples (42) - (44), where the negative word is part of the nominal group and precede the head nouns. These examples emphasize that fact that participle clauses have polarity choice. We can see in examples (27) - (44), information is negotiated. All of them obviously give information. We can see that those clauses are often as informative as finite ones. Therefore, the nominal group in the non-finite clauses carries as much modal responsibility as Subjects in finite clauses. There is thus no reason to dismiss the Subject status for this kind of nominal group.

9. Conclusion

Systemic functional studies in non-finite clauses often lead us to reconsider the applications of the rules and definitions that are quite elegant in the analyses in finite ones. For example, an unmarked Theme of the declarative clause is supposed to be the Subject. As Sado(2011) pointed out, the marked / unmarked contrast of Thematic structure cannot be applied to non-finite clauses because they cannot express the mood. My argument presupposes that non-finite participle clauses can have optional Subjects. However, studies in non-finite clauses have raised the question on the status of the nominal group as Subject. In section 6 and 7, we dissociated the term Subject from general understanding of the concept. Along with Finite, Predicator, Complement and Adjunct, it is an Interpersonal element of the clause structure. From a purely Interpersonal point of view, they carry the modal responsibility, and the proposition can be affirmed or denied by reference to the Subject. We have observed examples of participle clauses with Subjects, both positive and negative. Its function was no different from those in finite clauses. This is because the presence of Subject makes a non-finite clause closer to finite ones. As Sado(2009:50) claims, finiteness is gradient, those with Subjects are more finite and congruent as a clause than those without them. This study have hopefully shed light on one of the similarities between finite and non-finite clauses.

Notes

- 1 Presidents' names in parentheses mean they are examples from their first inaugural addresses.
- 2 These examples are from articles in *The Japan Times*. All the articles are reprinted in *The Japan Times News Digest* vol.36,37,39,41,42.
- 3 Some non-finite passive clauses have combination of gerund-participle and past participle. See an example from *Wordbank Onlie* through *Shogakukan Corpus Network*. I would like to express my gratitude to the Collins and Shogakukan for providing examples through the Internet.
Like a lot of abuse victims , Janice felt guilty about her uncle being jailed .

References

- Biber,D., S.Johanson, G.Leech , and E.Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman.
- Bloor, T. and M.Bloor (2004) *The Functional Analysis of English*, second edition, Arnold.
- Crystal, D.(1991) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, third edition, Blackwell.
- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha.
- Eggs, S.(2004) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*, second edition, Continuum.
- Frank, M. (1972) *Modern English: A Practical Reference Guide*, Prentice-Hall Inc.

- Halliday, M.A.K (1985) 'It's a Fixed Word Order Language is English' in J.J.Webster(2005) *Studies in English Language*, Continuum.
- Halliday, M.A.K and C.M.I.M.Matthiessen (2004) *An Introduction to Functional Grammar*, third edition, Arnold.
- Halliday, M.A.K and C.M.I.M.Matthiessen (2014) *Halliday's Introduction to Functional Grammar*, fourth edition, Routledge.
- Huddlston, H and G.K.Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.
- Otani,T.(1993) *America Daitoryo no Eigo Nixon / Ford*, ALC.
- Quirk,R., S.Greebaum, G.Leech, and J.Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of English*, Longman.
- Sado,K.(2009) "Grammatical Metaphor as a Relative Scale of Nominalization", *Konan Eibungaku* No.24
- Sado,K.(2011) "Finiteness and the Thematic Structure", *Konan Eibungaku* No.26
- Thompson, G.(2004) *Introducing Functional Grammar*, second edition, Arnold.

A Valediction

David W. Rycroft

Until I was thirty-six, I was a teacher at a grammar school in England. Once I arrived at Konan University, I had great opportunities for academic research, but simply surviving in a foreign culture, managing every day life, teaching a full quota of classes, fulfilling departmental responsibilities, acting as advisor at Konan's International Exchange Center and taking part in the Japan Studies program for the *ryugakusei* involved so much time and energy that I found it difficult to allocate adequate time for research. I have great admiration for colleagues who manage their careers better.

I regret not mastering academic Japanese so I could play a more constructive role in the activities of the Graduate School and research groups at Konan University. My greatest love is Shakespeare, and along with children's literature, Charles Dickens and British authors of books about India, he has been the focus of much of my research. I take an enthusiastic non-specialist interest in many other disciplines in the Faculty of Letters. But the language barrier has limited the degree to which I could engage constructively with colleagues in discussion.

In the 1990s, partly to make use of my increasing knowledge of Japan, and partly to explore a field less crowded with researchers than Shakespeare, I spent a short sabbatical in 1995-6 at Leeds University writing a thesis

entitled *Hamlet in Meiji Japan* for which I gained an M.A. by Research. This involved some original work on Kanagaki Robun's *kabuki* version of Hamlet which was published in the *Tokyo e-iri shinbun*, and a positive assessment of Tsubouchi as a *Hamlet* translator. I considered taking up Kawakami Otojiro at this time, but in the end I included only a passing reference to his work, something I now regret.

Due to a change in the regulations while I was enjoying my 6-month sabbatical, a change which had not been anticipated either by the Chairman of the English Department or the Dean of the Faculty of Letters, I found my one-year sabbatical had been postponed to such a degree that it was looking very much as if it would not come up before my retirement. The English Department took pity on me and offered to allow me to take a year off earlier. However, the Faculty of Letters took the view that this was irregular until the then Director of the Konan International Exchange Center, Professor Kuniko Uemura, offered to sponsor me and I was finally able to take a year off albeit at my own expense.

So thanks to the generosity of the English Department and the support of Professor Uemura, I was able to return to Leeds University for a year in 2005-6 where I was accepted as a 'twin site' doctoral candidate. I spent a year researching the amazing Kawakami Otojiro and his theater company. Unfortunately my mother, who lived quite near Leeds, died a few months after I returned to Japan. This meant family affairs kept me fully engaged for many months, and after that, the logic of remaining attached to Leeds (which was both inconvenient and expensive) seemed questionable. I suspended my Ph D research, hoping to take it up again in the future.

When I first considered working on Kawakami in 1995 few scholars had written much of significance on his career. But today there is an enormous increase in interest in Kawakami and his wife, Sada Yakko, with plans for a big conference in a couple of year's time. Last year I joined Kawakami scholar Professor Tierney (then Resident Director of Konan's Year in Japan Program) and a Japanese professor in giving presentations at a research meeting in Hakata for a citizens' group living in the area where Kawakami was born. We were able to visit Kawakami's grave and meet descendents of the Kawakami family still living in the area.

I have had the opportunity to talk about Kawakami's career recently, so here I would just like to outline the research areas which I am currently interested in pursuing in the future. I am interested in the contribution Kawakami made to the reform of the Japanese theatre in the last years of the Meiji Period. Kawakami was regarded as a man with 'no art worthy or the name' by Tsubouchi Shôyô. Academics tend to view the text of a play as having greater importance than it's stage performances, and few Kawakami texts have genuine literary merit. Western scholars followed the orthodox Japanese position and have been generally dismissive, despite being largely ignorant of his achievements. Many Meiji Period scholars believed that the way to reform the theatre was to produce European plays in translation. Kawakami believed new plays had to be written to reflect Japanese life and concerns targeting a popular audience. He was, of course, a great showman, and popularity with the audience was a major concern of a man with no money other than what he could make through his shows. But he also believed Western plays in translation had a role to play, and his striking modern versions of Shakespeare (including *Hamlet* and *Othello*) in the early

years of the 20th Century predated Tsubouchi's celebrated *Hamlet* production by several years. Kawakami made an important contribution to the popular theatre of the time.

I am particularly interested in the following aspects of his career:

1. The *soshi shibai*: early political plays staged by radical students which to a degree served the reform agenda of the Meiji political leaders.
2. Plays reflecting political incidents—the Liberal Party founder Itagaki's assassination attempt, and the Sino-Japanese War, for example. His series of plays and presentations on the Japanese victory in the war with China were embarrassingly jingoistic, but broke new ground in terms of content and technique, having something in common with multi-media presentations today.
3. The actual content of the plays he and Sada Yakko staged in Europe and America, especially any texts or extracts which have survived. In large measure he abandoned his plan of producing modern plays in response to Western audience demands to see Japan 'traditional' drama. (Some of his *daihon* are kept in the library at Waseda University.)
4. His contribution to theatre design and management. (He financed and built two Western-style theatres which were the earliest of their kind in Japan and involved innovations in everything from ticketing to toilets.)
5. His use of financial backers and the way his productions were funded and managed.
6. The impact of his actors after they left the company and joined other companies. Some respected actors started work in Kawakami's

company. I am interested in their careers and any written records they left behind them.

7. Contemporary articles and reviews in newspapers and magazines referring to Kawakami.

His wife, Sada Yakko, was a much better actor than Kawakami and had a great following at home and abroad. I am interested in:

1. Sada Yakko's contribution as a woman in playing women's roles in a company where *onnagata* were still employed to play most of the other female roles.
2. Sada Yakko's contribution to the School for Actresses which she founded with her husband.

Rather foolishly I suppose, I am still teaching eight or nine classes a week, despite having officially retired. It will take time to restart the Kawakami research. But I very much hope that the project will make progress in the future.

I wish all of you the best for your own research and look forward to meeting you at future research meetings. I am grateful for all the support I have received in the past, and feel tremendous affection for Konan University and all the students, colleagues and friends who have made my 30 years here so enjoyable.

[illegible]

「文明化の使命」と環太平洋地域の女性たち

安武 留美

2000年に始めたプロジェクトで、もう十数年経ってしまいましたが、アメリカ人女性たちが「文明化の使命」に駆られて展開した女性運動が、ハワイのアメリカ化一王制が廃止され、共和国となり、アメリカに併合されて準州、そして現在のようにアメリカ合衆国の州となったこと一、更には、太平洋地域におけるアメリカのグローバル化とどのように関わっているのかを研究しています。

事のはじめは、戦間期の1928年から1937年までに4回の国際会議を開いた汎太平洋婦人協会というハワイの白人女性を中心とした国際組織において、1934年から1937年まで日本人女性が会長の任を果たしたことに興味を持ったことでした。今では、別に驚くことではありませんが、当時は、英米の女性運動を源とする多くの国際的な女性団体一たとえばキリスト教系の婦人キリスト教禁酒同盟、また婦人参政権獲得のための運動から生まれた国際婦人参政権協会など世界各地に支部を持つ世界的な組織一が存在しましたが、当時は、やっと各国支部の代表をその国の女性が務めるようになってきた（その昔は、日本支部でも日本のことを知る西洋人が日本を代表していた）ところで、本部の役員は英米人（つまり白人）女性が独占していました。そのような中で、太平洋地域の各国に支部を持つこの汎太平洋婦人協会は、ハワイの白人エリートたちによって設立されハワイ、オーストラ

リア、アメリカ、カナダのアングロサクソン系の女性たちの主導する国際団体であったにもかかわらず、1930年に中国人の副会長、1934年に日本人の会長（ただし英国人と結婚していたので国籍はイギリス）を選出していたのです。しかも、日本と中国が全面戦争に入った1937年の8月にカナダのバンクーバーで開かれた第4回会議については、日本人会長のもとに中国の代表団も迎えて成功裡に終わったことが報告されていました。

数少ない先行研究は、汎太平洋婦人協会の人種的リベラリズムや平和志向の活動を称える傾向の強いもので、私の研究も「太平洋の楽園」と称された多人種社会ハワイに生まれたこの協会の人種的、政治的なリベラリズムを理解する目的で始まりました。また、他の研究と同様、この女性組織の国際的な面に焦点を当てるものでした。しばらく研究していると、汎太平洋婦人協会またその国際会議は、1) 戦間期に世界各地で高揚した女性運動の国際化の波の中で発足したこと、また、2) その活動は、19世紀の初め宗教復興運動の中で、アメリカ西部、そして太平洋を越えてアジアの「キリスト教化」つまり「文明化」に使命を感じる女性の活動の軌跡上に形成された親米的女性ネットワークに依拠していたことが明らかになってきました。しかし、この協会の発足またその活動の意義が何だったのか、まったくわからなくなってしまうました。

新たな転機となったのが、1年間ハワイの歴史や社会に触れる機会をもたらしてくれた在外研究でした。ハワイの視点からすると、女性の地位向上に貢献したと評価されることの多い、「文明化の使命」に駆られたアメリカ人女性たちの「heathen（異教の/野蛮な）」姉妹たちを援助するための活動の矛盾は顕著です。つまり、文明化・近代化以前のハワイ王国においては、ジェンダーよりも階位が重要であり、各

階層での男女はより同等・平等だったのです。そこへ「文明化の使命」を果たそうとアメリカ婦人宣教師たちが到来し、彼らが文明の象徴と自負するアメリカ・プロテスタント中流女性たちの行動規範－キリスト教的、民主主義的、資本主義的行動規範とともに、当時のアメリカのジェンダー規範－を唱え始めたのです。その結果、政治的にも大きな権力を持っていた王家の女性たちがキリスト教化し、一夫多妻制や妻の無能力化を強いる法・社会制度が整備されていきます。また、立憲君主制が確立し、王族・貴族階級の女性たちが伝統的に維持していた政治・経済的権利は徐々に否定され、さらには、砂糖栽培が王国経済を支える基幹産業へと発展し、世界から多様な労働者を受け入れる多人種プランテーション社会へと変化していきました。そして 19 世紀末には、アメリカ宣教師の子孫たちの主導した違法な、また法外な行為によって女王の廃位、共和制の成立、アメリカへの併合へと、ハワイのアメリカ化が進みました。しかし、アメリカ合衆国準州となった当時のハワイは、訪れたあるアメリカ人ジャーナリストが“**so much philanthropy and so little democracy**”とコメントしたように、ピューリタンの末裔たちを中心とする寡頭制社会だったのです。

そのような歴史的文脈の中で、新たに様々な目標を掲げてアメリカ人女性活動家がハワイにやってくるのです。当時（20 世紀初め）、婦人参政権の獲得がアメリカの多様な進歩的女性運動家たちの一大目標となっていました。19 世紀から受け継がれてきた白人プロテスタント女性たちの「文明化の使命」は、ソーシャル・ダーウィニズムの影響下で更に強化されていました。ハワイを訪れた本土の婦人参政権家たちは、女性参権の有無を尺度として文明化の程度を量ろうとし、アメリカ化により政治権力を奪われてしまった王族・貴族の女性も含めてハワイに居住する多文化・多国籍の女性たちすべてを、新た

に文明化の遅れた助けるべき姉妹たちとして位置づけてしまうのです。

従来のアメリカ史の文脈からは見えてこないハワイ固有の歴史や社会事情を理解するのにかなりの時間を費やしてしまいましたが、ハワイに、環太平洋地域の女性の連帯をめざした汎太平洋婦人協会が誕生したのはなぜなのか、また、この協会の活動の意義は何だったのかを、ハワイの歴史的文脈の中で、また国家を超えたトランス・ナショナルな視点で解明したいと思っています。

研究ノート

靈魂／靈／魂 ≠ Soul／Spirit

青山義孝

はじめに

「靈魂不滅説」は“the doctrine of the immortality of the soul”の訳語である。果たして **soul** は靈魂なのか魂なのか。仮に魂が **soul** で靈が **spirit** であるとするれば、靈魂に当たる英語はいったい何なのか。こんな素朴な疑問が湧いてくる。遠藤周作は『宗教と文学』の中で、西欧の文学は、基督教、特にカトリシズムが分からなければ、根本的に理解できない、日本人が分析したり、観念的に想像したりしなければとらえることのできないキリスト教的ニュアンスを、フランスの青年が、一瞬で実感出来るのは基督教的伝統のなかに育ったからである、と述べている(9-10)。またノースロップ・フライは『大いなる体系』で、ネイティブの英文学専攻学生でも聖書を知らない学生は、自分が読んでいるものの中で起こっていることの大半を理解していない、極めて慎重な学生でも、頻繁に含意を、ときには意味を取り違えている、と指摘している(xii)。

日本語では「靈魂」と「靈」と「魂」をほとんどと言っていいくら

い区別せずに使っている。ところが、西洋文化の源泉のひとつであるキリスト教は“soul”と“spirit”をはっきりと区別している。聖書の創世記によれば「霊」は「命の息」である。ところが、この意味での“spirit”に相当する日本語はないといっても過言ではない。その証拠に 16 世紀末に日本におけるキリスト教布教のために日本語で書かれた『どちらいな一きりしたん』は次のように書いている。

人間は色身斗にあらず、果つることなきあにまを持也。このあにまは色身に命を与へ、たとひ色身は土、灰になると云とも、此あにまは終る事なし。(『キリシタン書 耶蘇書』16)

もちろん、「靈魂」「霊」「魂」ということばは当時の日本語にも存在していたが、これらは“spirit”を表すことばではなかったために、ラテン語をそのままひらがなで「あにま」と表記したのである。

他文化を読み解釈することは、言い換えれば他文化を自分の文化に「翻訳」する行為であるが、移し変える先の自分の文化に適切な受け皿がない場合がある。その一例が「靈魂」「霊」「魂」と“soul”、“spirit”である。

研究者として本格的に外国文学を研究し始めて 30 有余年になる。いつのころからかは定かでないが、特に翻訳を読んでいるとき、「靈魂」とか「霊」とか「魂」という訳語が出てくると原語が何なのかが気になって仕方ない。英語に限定すれば、当然該当する単語は soul と spirit (もしくは ghost) になるのだろうが、初級英語の常識に従って単純に考えれば、soul が魂と訳され spirit が霊と訳されているのだ

ろうと思いたくなる。(もっとも「靈魂」になると元の英語の見当がつかない。) 宗教性の濃い作品を翻訳で読んだりしていて「魂」とか「靈」という訳語にぶつかると、魂は **soul** で靈は **spirit** の訳であろうとおおよその見当をつけて読むのだが、このおおよその見当も当たらない場合が多い上に、「靈魂」に至ってはまったくのお手上げである。**soul** も **spirit** も往々にして靈魂と靈と魂と三様に訳されていて、しかもその訳し分けに特に規則性といったようなものは見受けられないことが多い。

ところがキリスト教辞典などを読むと魂と靈との違いが強調されているのに出会って驚く。日本人の靈魂觀の常識とは相容れないのである。例えば『聖書思想事典』は「魂は、命の徴ではあるけれども、命の源ではない。これがセム人と考え方とギリシアのプラトンの考え方とをふかく隔てる相違点である」と述べて靈魂觀におけるヘブライズムとヘレニズムの違いを鮮明に打ち出している。さらにヘブライズムにあつては「けっして“死ぬ”とはいわれずに神に“返る”といわれる靈とは異なり、魂は、骨や肉のように“死んだり”“死に渡されたり”する」(557-60)。つまり、『聖書思想事典』によれば、ヘレニズム思想は魂を不滅と考えるが、ヘブライズム、すなわちキリスト教においては、神に返る靈は不滅である一方で魂は死ぬ。少なくともヘブライズム思想にあつては、靈と魂の間には大きな違いが存在する。

これに対して日本人の靈魂觀において靈魂と靈と魂はどういう関係にあるのだろうか。五木寛之と鎌田東二は『靈の発見』における対話の中で次のように述べている。

五木 霊とはいったい何なのか。『広辞苑』でひいてみると「①肉体に宿り、または肉体を離れて存在すると考えられる精神的実体。たましい。たま」とあります。肉体の中にこもっているかと思えば、肉体を離れて存在するともいう……。その魂とは、いったいどこにあるのか。かねがね私は、素朴な疑問をもって

いるんですが。

鎌田 魂はどこにあるか、ということですけど、どの民族の神話や信仰でも、だいたい、風と靈魂と呼吸が結びついていますよね。それはどこからやってきたか。吹き抜けて行ったり、体内をめぐったり、深く大きく動かしていく力……。 (30)

ここで注目したいのは、霊から魂へ、魂から靈魂へと移ろっていくごく自然な言葉（意味内容にさしたる違いはないので観念ではない）の流れである。この二人の対話には、言葉の上での違いはあっても概念の上での違いがあるようには思えない。これを読む日本人のほとんども何の違和感も抵抗もなく読むに違いない。

山折哲雄の興味深い文章を引用してみよう。

タマ(魂)の歴史はおそろしく古い。それを霊とか靈魂と表記し、精霊の語をあてる場合もあるが、大和言葉で由緒正しいのがタマだった。これは起源的には玉とも同根とされており、魂がまんまるい球体とイメージされていたところが面白い。 (39)

山折によれば、大和言葉で由緒正しいのがタマ(魂)でそれを霊とか

靈魂と表記するのが日本人の靈魂觀における靈魂と靈と魂の関係ということになる。要するに靈魂と靈と魂の間にさしたる違いはない。**soul** も **spirit** も往々にして靈魂と靈と魂と三様に訳されて、しかもその訳し分けにこれといった規則性が見受けられないのも当然である。

西洋文化の二大源泉はヘレニズムとヘブライズムである。この二つの文化が融合してできあがっているのが西洋の思想なり文化である以上、日本人である我々が西洋の文化を理解する上で、ヘブライズムにおける靈と魂の違い、およびヘレニズムとヘブライズムにおける靈魂觀の違い、ならびに西洋と日本における靈魂觀の相違は無視してはならない重要な問題と言えよう。

1

西洋と日本における靈魂觀の相違を考察する一助としてまず訳語の状況を三種類の例を挙げて検討する。長くなって恐縮だが、最初の例としてジェイムズ・G. フレイザーの『金枝篇』の一節を引用しよう。なお、原文は注を参照していただくこととして、ここでは便宜上該当する訳語の後ろに原語をカッコ内に入れておくことにする。

靈魂〔**soul**〕は一般に身体の自然的な孔口、特に口や鼻孔から脱出すると信じられている。それでセレベスでは、時として釣針を病人の鼻や臍や足などにつけて、もし靈魂〔**soul**〕が逃げ出そうとすればこれに引っかかって抑留されるようにして置く。ボルネオのバラム河畔のトゥリク族のある者は、いくつかの鉤状の石

を手ばなすことを拒絶した。それは、彼がその靈魂〔soul〕をいわば引っかけて置いて、自分の靈的な部分〔spiritual portion〕が物質的部分から分離するのを防いでいたからである。海ダイヤク族の魔法使または呪術師が免許皆伝になると、その手指には釣針が生えているように思われた。彼はそれをもって、今にも飛び出そうとする魂〔soul〕をとらえ、再び病人の身体に引き戻すのであった。しかしこの釣針が味方の靈魂〔soul〕ばかりでなく、同時に敵の靈魂〔soul〕をとらえるにも役立ったことは明らかである。この原理に立って、ボルネオの首狩り人は木製の鉤を殺した敵の髑髏の傍にかけ、こうして置くと次の侵掠の時に新しい首をとる助けになると信じている。ハイダ・インディアンの呪術師の用具の一つは、中のうつろになった一本の骨であって、逃げようとする靈魂〔departing soul〕をこれで捕えて、再びその宿主に返すのである。ヒンドゥーは人前で誰かがあくびをすると、きまって拇指をぱちんと鳴らすが、こうすると開いた口から出かかっている靈魂〔soul〕をとどめることができると信じている。マルケサス群島民は瀕死の人の靈魂〔soul〕が逃げて行くのを妨げて生命をならえさせるために、その口と鼻を塞ぐのであった。ニュー・カレドニア人にも同じような慣習があると報告されている。フィリピン群島のバゴボ族は、同じ目的のもとに病人の手首や足首に銅線の輪をはめる。南アメリカのイトナマ族は、魂〔ghost〕がぬけ出して他人の魂〔ghost〕まで誘うような場合には、瀕死の人間の眼、鼻、口などを塞いでしまう。ニアス島民は近頃死んだ人の霊〔spirit〕をおそれ、それを息と同一視するのであるが、

同じ理由から屍体の鼻孔を塞いだり顎を縛ったりして、浮浪の靈〔ghost〕を地上の幕屋に押しこめて置こうとする。オーストラリアのワケルブラ族は、屍体をすてて逃げる際に、魂〔ghost〕が追いつくことの出来ぬくらい遠方まで逃げのびるまでそれを屍体に留めて置くため、両耳に熱い炭を押しつけておく。南部セレベスでは、産褥中の女の靈魂〔soul〕が逃げ出すのを防ぐために、産婆が産婦の身体に帯をできるだけきつく巻きつける。スマトラのミナンカパウ人も同じような慣習を守っている。ひと束の糸か紐を産婦の手首または腰のまわりにきつく縛りつけ、産みの苦しみの間にその靈魂〔soul〕がぬけ出そうとしても、出口が塞がれてあるので逃げられないようにするのである。セレベスのアルフル〔森の人〕といわれる人々は、赤ん坊の魂〔soul〕が逃げ去って生まれるとすぐ死んでしまわないようにと、お産が間近に迫った時分には注意して家じゅうの出口という出口を鍵穴まですっかり塞いでしまう。壁の割れ目や隙間なども埋めてしまう。そのうえ家の内外のすべての動物の口も、赤ん坊の魂〔soul〕を呑みこんではいけないというので、すっかり^{かんこう}箆口具をはめてしまう。同じ理由から、その家にいる者は産婦に至るまで、お産のあいだじゅう口を閉じていなくてはならない。なぜ鼻も赤ん坊の魂〔soul〕が入って来ないように閉じて置かないのかと訊かれた時の返答は、息は鼻孔を通して入っても行くが同時にまた出ても来るので、魂〔soul〕はそこに落ちつく間もなくまた吐き出されるから心配はない、とのことであつた。文明化した諸民族の言葉で、口の中に心をもつとか、魂〔soul〕を唇の上あるいは鼻の中にも

つとか言う通俗的な表現をするのは、生命あるいは靈魂〔soul〕が口また鼻孔を通して逃げるという觀念がいかにも自然なものであるかを示している。

靈魂〔soul〕はまさに飛び立とうとする鳥のようなものだとしばしば考えられた。この觀念はおそらく大方の言語にその跡をとどめており、更に詩歌には比喩としての命脈を保っている。マレー人はこの鳥形靈〔soul〕の觀念を、色々と奇妙な方法で表わしている。靈魂〔soul〕が翼のある鳥なら米を与えたら寄って来ようから、この方法で飛び去ろうとするのを引き留めることもできるし、危険な飛翔を試みているものを誘いもどすこともできるのである。たとえばジャワでは、赤ん坊をはじめて地面へおろす時には〔これは未開民族が特に危険だと考えるらしい瞬間であるが〕まずそれを鳥籠の中に入れて、ちょうど鶏を呼ぶように母親がコッココッと言う。ボルネオのシンタンという地方では、男でも女でも子供でも家や樹から落ちて運びこまれる場合には、その妻か親族の女がすぐさま奇禍の起こった場処へかけつけて、黄色に染めた米をそのあたりに撒きちらしながら、「コッコッ魂〔soul〕よ」と呼ぶ。家の中でも再び同じことを繰り返して呼ぶ、「コッコッ魂〔soul〕よ」と。それから撒いた米を器に拾い集めて怪我人の許へ持って行き、それを手でつかんで彼の頭の上に落して、また「コッコッ魂〔soul〕よ」と呼ぶのである。明らかにこれは、その辺をうろうろしている鳥形靈〔soul〕を餌でおびきよせて、再び持ち主の頭の中へ戻そうという意図をもってなされるものである¹。（永橋卓介訳 72-75）

訳し分けの状況を集計すると次のようになる。

靈魂 (soul)	14 回
魂 (soul)	9 回
靈 (soul)	2 回
魂 (ghost)	3 回
靈 (ghost)	1 回
靈 (spirit) 靈的な部分 (spiritual portion)	3 回

計 25 回の soul のうち「靈魂」と訳されたのが 14 回、「魂」と訳されたのが 9 回、「靈」と訳されたのが 2 回である。また英語で ghost は spirit とほぼ同じ意味合いを持って使われるので同じ範疇に入れて集計すると、spirit (ghost) 計 7 回のうち「魂」が 3 回、「靈」が 4 回である。

ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』から、いよいよディムズデイル牧師が息を引き取る瞬間を描いた場面を取り上げて 7 種類の翻訳を例に取ってみよう。

That final word came forth with the minister's expiring breath. The multitude, silent till then, broke out in a strange, deep voice of awe and wonder, which could not as yet find utterance, save in this murmur that rolled so heavily after the departed spirit. (339)

この最後の言葉は牧師の絶えゆく息の下から語られた。そのときまで黙っていた群衆は、奇妙な底深い声を一せいに発した。それはただそうした低いひびきによって、ようやく今いい現わし得た畏怖と驚異の情であった。そしてそれはこの世を去った人の魂を追って、重々しくよろめいていたのであった。（福原麟太郎訳）

その最後の語は牧師のいまわの息といっしょにもれた。それまで黙っていた群衆は、どっと、畏れと驚嘆のこもる異様な声を一つに合わせて太く低く発したのだ。しかしそれはまだ言葉にならず、今は亡い霊を追って重苦しくよろめくようなこのささやきとなって現れただけなのだ。（鈴木重吉訳）

この最後の言葉は、牧師の絶命する息とともにもらされた。そのときまで沈黙していた群衆は、畏怖と驚異の奇妙な深い声をあげたが、それは世を去った魂のあとをおもおもしろくころがってゆくこのつぶやき以外には、まだ表現のしようもないものだった。（小津二郎、大橋健三郎訳）

この最後のことは牧師の絶えんとする息とともに出た。そのときまで黙っていた群衆は急に畏怖と驚異のこもった奇妙な太い深い声をあげた。それは、今は亡き霊を追って重々しくころがり出るこういうつぶやき以外には、まだことばにならないものであった。（刈田元司訳）

この最後の言葉は、牧師が息をひきとる間際に聞こえてきた。それまで静まりかえっていた群衆は、畏怖と驚嘆のこもった異様なまでに低い声をはき出したが、その気持ちは、死者の霊を追って実に重々しく流れているこのささやき声のなかにはじめて、どうにかやっと表現することかできるものであった。（大井浩二訳）

この最後の言葉は牧師の消えゆく息とともにもれ出た。それまで黙りこくっていた群衆は、その期になっても、ただ去りゆく靈魂のあとをしたって重々しくうねりゆくこのつぶやきによるほかは、あらわしようがなかった畏怖と驚異の念を、そういう奇妙な低い声をもって表現したのであった。（八木敏雄訳）

この最後の言葉は、牧師が息を引き取る最後の息と重なった。ずっと静まっていた群衆は、ついに驚愕の声を発したが、ほとんど声にもならないような、おかしい深い音が洩れただけで、去っていった魂のあとに尾を引く重苦しいざわめきにしかならなかった。（小川高義訳）

最後の **spirit** は「靈魂」（1 回）、「魂」（3 回）、「靈」（3 回）と訳されている。まさに三様の訳である。もちろん先にもみたようにこれらの 3 つの言葉をほとんど区別なく使用するのが日本語の習慣であるから、いずれの訳し方が妥当というわけのものではない。

とはいいいながら、原文の意味を正確に伝えるという観点から考えれば話は違ってくる。創世記によれば、神は土で作った人間の鼻から息

を吹き込んで命を与えた。これがインスピレーションの原義である。**inspire** はラテン語で **into** を意味する **in-**と **breathe** を意味する **spirare** からなる動詞で「息を吹き込む」が元来の意味である。さらにこの **spirare** の派生語が **spirit** である。冒頭でふれた『どちらいなーきりしたん』の文章を検討してみよう。

人間は色身斗にあらず、果つることなきあにまを持也。このあにまは色身に命を与へ、たとひ色身は土、灰になると云とも、此あにまは終る事なし。

これは創世記第2章第7節に基づいた翻案と言える文章であるが、元になっているウルガータ訳聖書のラテン語訳文と欽定訳聖書の英語訳文と3種類の日本語訳聖書の日本語訳文を並べてみる²。

Formavit igitur Dominus Deus hominem de limo terræ, et inspiravit in faciem ejus spiraculum vitæ, et factus est homo in animam viventem.
(Biblia Sacra Vulgata)

And the Lord God formed man of the dust of the ground, and breathed into his nostrils the breath of life; and man became a living soul. (King James Version)

エホバ神土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘入たまへり人即ち生靈となりぬ。(文語訳)

主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。(口語訳)

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。
(新共同訳)

ウルガータ訳の“*spiraculum vitæ*”、“*animam viventem*”に当たる言葉を
欽定訳はそれぞれ“*the breath of life*”、“*a living soul*”と訳し、新共同訳
は「命の息」、「生きる者」と訳している。欽定訳の“*the breath of life*”
は *spirit* のことであるので、ウルガータ訳と欽定訳は神によって吹き
込まれる「霊」と霊を吹き込まれることによって命をもつことになる
「魂」の訳し分けという点では一致している。“*animam viventem*”、“*a*
living soul”に相当する訳語として文語訳は「生霊」を充て、口語訳は
「生きた者」を充て、新共同訳は「生きる者」を充てているところに
苦勞の跡がうかがえる。語義的には文語訳の生霊に近いのであろうが、
霊と魂の訳し分けの問題もあるし、なにしろこの訳語では日本のいわ
ゆる「生霊」「死霊」の生霊を連想させてしまうからか、口語訳、新
共同訳では変更されている。

こうした背景を勘案しながら先のホーソーンの文章を読むと、ディ
ムズデイル牧師の“*expiring breath*”が神によって吹きこまれた息すな
わち命が肉体から出ていくことを表していることが読み取れる。それ
はまた“*departed spirit*”でもある。ここで *spirit* は息であり命である。

とすれば、この“departed spirit”は「去りゆく霊」と訳するのが無難といったところであろうか。

マーク・トゥエインの『ハックルベリー・フィンの冒険』に、井戸に落ちて溺れて死んだスティーヴン・ダウリング・ボッツという男の子を悼んである娘が書いた詩が出てくる。その終りの2連を引用しよう。

O No. Then list with tearful eye,
 Whilst I his fate do tell.
 His soul did from this cold world fly,
 By falling down a well.

They got him out and emptied him;
 Alas it was too late;
 His spirit was gone for to sport aloft
 In the realms of the good and great.

(726)

これがどう翻訳されているか、5種類の翻訳を並べてみる。

されば、涙あふるる眼もて聞け、
 彼が運命を。
 彼の魂がこの冷たき世から飛び去りしは
 井戸に落ちたるためなり。

人みな彼を引き上げ、水を吐かせたり。
 されど、ああ、間に合わず。
 彼が魂は善き人、大いなる人の王国にて、
 空高く舞い遊ばんと去りにけり。（村岡花子訳）

いな。そがさだめを今ぞ語らん
 目に涙して聞きたまえ
 そが魂は井戸に落ちて
 冷たきこの世を去りしなり

救い出して吐かせども
 ああ、時すでに遅かりし
 靈魂はやも天翔けり
 よき人の国に遊びたり（西田実訳）

わがスティーヴンはこの世をば
 井戸にはまりて去りにけり。
 涙にくれて聞きたまえ
 わが物語るものがたり。

引き出し水を吐かせしも
 悲しや既に手おくれで
 わがスティーヴンの魂は

あまがけりけるかも天国へ。 (石川欣一訳)

そうではなかった。されば、目に涙して聴きたま
え

あの子の運命を語りきかせるそのあいだ。
あの子の魂が冷たきこの世からとびさっていった
のは
実は井戸に落ちたためなのだ。

みんなは救い出して水を吐かせた。
だが悲しいことに手遅れだった。
あの子の魂はすでに飛び去っていた。空高く
遊ばんがために、善良で偉大なる人々の住むあの
国で。 (大久保博訳)

いや。私とそのさだめを語るとき、
目に涙して耳をかたむけよ、
その魂は井戸に落ちて
冷たいこの世から飛び去った。

引き上げて水を吐かせても
ああ、時すでに遅い、
靈魂は去って天に昇り
善にして偉大なる人の国に遊ぶ。 (山本長一訳)

村岡訳と大久保訳は **soul** と **spirit** の両方を「魂」と訳し、石川訳は **soul** は訳出せず **spirit** を「魂」と訳し、西田訳と山本訳は **soul** を「魂」**spirit** を「靈魂」と訳している。考えようによっては、表面的には、作者のトゥエインが **soul** と **spirit** の相違をあまり意識せずに用いているとも見受けられるので、原文の **soul** と **spirit** を入れ替えてもさしたる支障はなく、この三様の訳し方で意味上の大きな違いが生じているとはいえない。しかしながら、注意して読むと、トゥエインは少年が息を引き取って地上を離れる時は **soul** を、天国でおそらくは天使たちと遊んでいる姿に言及する時は **spirit** を用いている。パウロは「死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか」という問いに対して、「自然の命の体で蔭かれて、靈の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、靈の体もあるわけです」(第一コリント 15:35, 44) と答えている。ここでパウロは復活の体が地上の体とはまったく別種の体であることを強調しているが、トゥエインが地上を離れる時は **soul** を、天国で遊んでいる姿に言及する時は **spirit** を用いている裏に、この「自然の命の体」から「靈の体」への変化を読み取ることができよう。

さてこれまでは訳語としての靈魂と靈と魂の使用状況を検討してきたが、ここで翻訳ではない日本語における使用状況を検討してみよう。

人間は死ぬとどこにゆくのか。これはおそらく人類にとって太古以来、最も難しく同時に最も重要な哲学的問題であった。そして

何万年かの思索の間に人類は一つの答えを生み出した。人間の霊はあの世からやって来て、そして一つの生命となって成長する。成長した生命はやがて衰退し、そして死ぬ。死ぬと魂はあの世、つまりまた天へと帰ってゆく。そして天に帰ってゆく魂が、また再び、何十年か何百年の後にやって来て子孫の生命となってこの世に復活するのである。それゆえに死者はできるだけ早くあの世に送らなければならない。早く送れば、またこの世への帰還が早くなる。しかし、人間の霊はすぐには天に昇れない。しばらく天に近い山にとどまり、山から天に昇るのである。そのような霊が天に昇る、その霊の国の入り口である山は、やはりそれらしい特徴が必要である。それには巨大な岩がなくてはならない。そして同時に天の国の入り口を示す洞穴があれば一層良いのである。山寺は、そういう条件にぴったりなのである。 （『日本の深層』270-71）

これは梅原猛の文章であるが、ここでの霊と魂の間には完全な互換性が読み取れる。

つづいて世阿弥の「夢幻能に見る暗黒の衝動と鎮魂」を論じながら、世阿弥の美の秘密を解く鍵を示している梅原の文章を、長くなるが、抜粋しながら引用しよう。

夢幻能において、シテはあくまで死者の霊である。〔……〕舞台の上に生彩を放って荒れ狂う死霊に対し、何と生者の色あせて

見えることであろう。私にはここに、中世という時代のもつ、不思議な宗教性があるように思われると共に、世阿弥の心に隠れた人間にたいする強い絶望のようなものがのぞいているように思われるのである。

しかも死者たちは、安心して墓場の中で眠っているような死者ではない。多くは生きていたときには絶望のあまりに、死んだり殺されたりした死者たちであるが、今なお彼らが絶望した現世に執着は残っていて、彼らの生の思い出を示すものに、その死霊はまつわりついてさまよっているのである。[……] しかも能において、生きた霊をもつものは、人間のみではなく、動物も植物も、人間と同じような靈魂をもち、その霊は、彼らが死んだ後に、人間の形となってあらわれることさえあるのである。世阿弥の世界は、このような霊の汎神論とでもいうべき世界なのである。[……] このような存在論は、日本の古くからあり、神道に現われ、密教にうけつがれ、日本文化の深い根底に存在するものとなっている。世阿弥の世界もまさにそのような世界であり、一切のものが背後に陰影にみちた生ける魂をやどしている世界なのである。

普通、このような深い魂の秘密は、あらわになっていないのである。この魂の秘密をかぎ出すには特定の人が必要なのである。能には、ワキとしてたいていの場合、諸国一見の僧が登場する。諸国一見の僧は、二重の点で、霊の世界をみるにふさわしい資格をもっているのである。彼は僧であり、僧は何よりも霊の世界の探求者なのである。特に彼は、由緒のある死んだ霊のことについて並々ならぬ好奇心をもつのである。しかも彼は僧であると同時に

に旅人なのである。旅人は日常的な俗な世界から解放された人間である。このような日常性からはなれた人間の眼にのみ霊の世界は姿を現わすのである。アイの名で登場する里人には、霊の世界が見えないのである。[……]

霊の裸の姿の何というすさまじいことだろう。愛欲、嫉妬、絶望、怒り、恨み、妄執、罪、争い、苦悩。人間の中にあるあらゆる暗黒の衝動が荒れ狂い、霊の心をそのもっとも深いところにおいて動揺させているのである。この荒れ狂い、猛り狂う霊の乱舞が、能の見せ場であろうが、このように霊が荒れ狂い、猛り狂うものとなるとき、ワキの僧は単なる観照者の立場にとどまらず、この荒れ狂う霊の鎮魂者となるのである。つまり霊が徐々に不安と矛盾に満ちた姿を現わすにつれ、逆に僧は、はじめの好奇心に満ちた探求者から、静かな霊の世界の観照者となり、そして荒れ狂う霊の鎮魂者となるのである。（『美と宗教の発見』266-71）

ここでも霊魂と霊と魂という三つの言葉が、まるで繰り返しを避けるための言い換えのように使われている。しかも最後の「霊の鎮魂者」という表現にも何ら違和感はない。著者である梅原は当然のことながら、読む側のわれわれも違和感を覚えない。

2

では辞書がこの **soul** と **spirit** という英語、および靈魂と霊と魂という日本語をどのように定義しているのかを調べてみよう。まず英和辞

典の例として研究社の『新英和大辞典』と小学館の『ランダムハウス英語辞典』を挙げる。

『新英和大辞典』はこの2つの単語の意味を次のように定義している。

spirit

1. (生命の) 息, 生氣, 精氣 (神によって吹きこまれる息の中にあると考えられた生命力の根源). 2. a 人間の靈的部分, 靈, 心 (soul). b (死体から離れた) 靈魂. c [通例 S-] (神の) 靈, 神靈. d [the S-] 聖靈 (the Holy Spirit). 3. a 亡靈, 幽靈 (ghost). b (天使・惡魔・惡鬼・妖精など) 超自然的存在. 16. (クリスチャンサイエンス) 神.

soul

1. a 靈魂, 魂; 精靈, 靈 (人間の肉体に宿り、生命・思考・行動・心の根源で、肉体から離れても不滅で存在すると考えられ、また来世で幸・不幸になると考えられているもの; cf. body, flesh). b 死者の魂, 故人の靈 (departed spirit), 亡靈 (disembodied spirit). c 精神, 心 (mind, heart). 8. (キリスト教) 神, 人間の神性.

続いて小学館『ランダムハウス英語辞典』。

spirit

1. (肉体を働かせたり肉体と魂とを媒介する) 生命の原動力;

(神によって吹き込まれる) 生命の息吹 ; 生氣.

2. 人間の靈的部分, (物質に対して) 精神, 心. (死んだとき
肉体から分離するとされる) 魂, 靈魂 (soul) .
3. 超自然的で実体のない存在, (…の) 精, 精靈, 幽靈, 亡
靈 ; 妖精 ; 天使 ; 惡魔.

soul

1. 魂, 靈魂 : 肉体とは別個の実体とみなされ, 来世において幸
福または不幸になると信じられているもの.
2. (肉体に対して) 精神, 心.
3. 死者の靈, 亡靈.

『ランダムハウス英語辞典』はさらに類語として両者の違いを次のように指摘している。

soul 肉体 (body) の対語で肉体に生命と力を付与するもの. 人間の本質的な部分で永遠不滅のもの :

Our souls will live on when our bodies perish. 肉体は滅んでも魂は生き続ける.

spirit 肉体を越えた次元での活動力としての精神. また, 元来肉体を備えていない存在も指す.

『新英和大辞典』は **spirit** に「魂」の訳語は当てていないが、『新英和大辞典』『ランダムハウス英語辞典』ともに、ほぼ同じ定義を付している。日本の代表的な英和辞典がこうした訳語を載せている事情を

勘案すれば、翻訳で **soul** と **spirit** を靈魂と靈と魂の三様に訳し分けている実情は十分納得できる。

さて、では日本語における靈魂と靈と魂との違いはいかなるものなのであろうか。ここでも辞書における概念の定義から探してみよう。まずトップバッターは分かりやすい定義で人気のある三省堂の『新明解国語辞典』。

魂 生きている動物の、生命の原動力と考えられるもの。死後は、肉体を離れるといわれる。「靈」とも書く。

魂鎮（め） 生きている人の魂が抜け出す（抜け出した）のを呼び戻し、長寿を祈ること。

靈 ①人間の知識や経験を超えてそこに何かあると感じられるが、実体としてはとらえられない神秘的な現象（存在）。②死者の魂。

靈魂 その人が生きている間はその体内にあってその人の精神を支配し、死後もいろいろな働きをなすと考えられるもの。

いずれも生きている間は肉体に宿り、死後肉体から離れるものであるという点が共通し、多少の相違はあるもののそれぞれがそれぞれの同義語になりうるという点を特色として挙げることが可能である。靈魂、靈、魂の間に意味の上でそれほど大きな違いは見受けられない。

ではもう少し大きな辞書ではどうであろうか。『広辞苑』『学研国語大辞典』『大辞林』の順にそれぞれの定義を列举する。

『広辞苑』

魂 動物の肉体に宿って心のはたらきをつかさどると考えられるもの。古来多く肉体を離れても存在するとした。靈魂。聖靈。たま。

靈 肉体に宿り、または肉体を離れて存在すると考えられる精神の実体。たましい。たま。「靈魂・靈肉・幽靈・靈前」⇔肉。

靈魂 ①肉体のほかに別に精神的実体として存在すると考えられるもの。たましい。⇔肉体。②人間の身体内にあって、その精神・生命を支配すると考えられている人格的・非肉体的な存在。病気や死は靈魂が身体から遊離した状態であるとみなされる場合が多く、また靈媒によって他人にも憑依しうるものと考えられている。性格の異なる複数の靈魂の存在を認めたり、動植物にも靈魂が存在するとみなしたりする民族もある。

靈魂信仰 靈魂の存在を信じ、その影響をおそれてこれを崇拝すること。

靈魂不滅 人間の靈魂が肉体の死後も存続するという観念。

『学研国語大辞典』

魂 人間の肉体に宿り、精神の働きをつかさどると考えられるもの。昔から肉体とは別に存在すると考えられてきた。

靈 ①肉体に宿って、その行為を支配する働きをすると考えられるもの。靈魂。たましい。精神。②死者のたましい。靈魂。③目には見えず、はかりしれない不思議な力をもっているもの。何かあると感じられるが実体としてはとらえられない現象・存

在。

靈魂 肉体とは別の存在であって、しかも肉体に宿って精神的・生理的諸活動を支配し、死後は肉体からはなれて滅びずにのこるとかんがえられている精神現象のおおもと。たましい。靈。
⇨肉体。

『大辞林』

魂 人の肉体に宿り、生命を保ち、心の働きをつかさどると考えられているもの。肉体から離れても存在し、死後も不滅で神靈になるとされる。靈魂。また自然界の万物にやどり、靈的な働きをすると考えられているものを含めていう場合もある。

たま【魂・靈・魄】たましい。靈魂。万物にやどり、また遊離しやすい存在と意識され、「木靈」「言靈」「船魂」「和魂（にぎたま）」「荒御魂（あらみたま）」など多く複合した形で用いられるとともに、「魂祭り」「魂送り」「鎮魂（たましずめ）」「御魂振（みたまふり）」などの行事や呪術を表す語形をも生じた。

靈 れい（漢）たましい。特に、死者のたましい。②万物にやどる精気。神。③不思議な。神秘的な。神聖な。

①人間や動物の体に宿って、心のはたらきをつかさどり、また肉体を離れても存在すると考えられる精神的実体。たましい。②死んだ人のたましい。みたま。③目に見えない不思議なはたらきをもつもの。神靈。

靈魂 肉体に宿ってそれを支配し、精神現象の根源となり、肉体が滅びても独立に存在することのできるもの。たましい。靈。

未開宗教、特にアニミズムにおいて、無生物や動植物に宿る目に見えない存在。

霊魂信仰 肉体を離れた霊魂の存在を信じ、その影響をおそれて、これをまつこと。例えば、平安時代の御霊（ごりょう）信仰など。

霊魂不滅説 人間の霊魂は肉体の生滅を超えて永遠に存続するという説。輪廻転生・祖先崇拝などの前提をなす。

以上あげた四種類の日本語辞典に共通して言えることは、霊魂、霊、魂のいずれをも、人間に関わりをもつものとしてとらえていることである。人間に関わりをもたないものとしては、霊に関して、『学研国語大辞典』が「③目には見えず、はかりしれない不思議な力をもっているもの。何かあると感じられるが実体としてはとらえられない現象・存在」を挙げ、『大辞林』が「③目に見えない不思議なはたらきをもつもの。神霊」を挙げている程度である。また『大辞林』が「たま」に「魂・霊・魄」の漢字を充てているのも注目に値する。

最後に『オックスフォード英語辞典』がどのように **soul** と **spirit** の2語を定義しているか見てみよう。

soul

- the principle of life in man or animals; animate existence.
- the spiritual part of man considered in its moral aspect or in relation to God and His precepts. Freq. with implicit reference to the fate of the soul after death, and so partly belonging to sense.

- the spiritual part of man regarded as surviving after death and as susceptible of happiness or misery in a future state.
- the disembodied spirit of a (deceased) person, regarded as a separate entity, and as invested with some amount of form and personality.

spirit

- the animating or vital principle in man (and animals); that which gives life to the physical organism, in contrast to its purely material elements; the breath of life.
- the soul of a person, as commended to God, or passing out of the body, in the moment of death.
- the disembodied soul of a (deceased) person, regarded as a separate entity.

disembody = to separate (a soul) from the body.

disembodiment = separation (of a spirit) from the body.

- a supernatural, incorporeal, rational being or personality, usually regarded as imperceptible at ordinary times to the human senses, but capable of becoming visible at pleasure, and freq. conceived as troublesome, terrifying, or hostile to mankind.
- the Spirit of God (or the Lord), the active essence or essential power of the Deity, conceived as a creative, animating, or inspiring influence.

注目したいのは“spirit”の最後に挙げた釈義“the Spirit of God (or the

Lord), the active essence or essential power of the Deity, conceived as a creative, animating, or inspiring influence”である。この“the Spirit of God”という意味は日本語辞典にはない。つまり日本語には、あるいは日本の靈魂観には、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という一神教における創造神（の霊）という概念が欠けているのである。

日本人の靈魂観を検討する上で重要な例として柳田國夫説をみてみよう。柳田が『先祖の話』で強調したのは、「日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠くへは行ってしまうという信仰が、おそらくは世の始めから、少なくとも今まで、かなり根強くまだ持ち続けられている」ということである(61)。長くなるが、精霊とみたまに関する柳田の説に耳を傾けてみよう。

盆と正月と両度の魂祭が、おのおの一方に偏して発達するようになってから、我々の先祖たちはこれを二つに区別する方に力を入れ、次第に共通の点を見落そうとする傾きを生じた。その中でも著しいのは新年には「みたま」といい、盆に限ってショウロまたは精霊さんなどということで、このためにおいおいと別ものようになって来たが、二つは元来が同じものの和語漢語であった。
[……]

精霊とみたまと、二つどちらが古いかは言わずとも判っている。それよりもどうしてこのような古い佳い国語があるのに、すき好んで発音のかなり面倒な漢語なんかを採用したかが問題になるのだが、これには盆と正月の魂祭を、二つに分けて考える必要という以外に、もっと小さな理由があってこんな新語を用い始め、

それが結局は二者の対立を招いたとも見られるのである。

漢語の輸入が我々の言葉の意義を紛乱させる原因となっていることは、もちろんこれが最もはなはだしい一例でもあるまいが、ここでもやはり言葉の変って来た筋道を明らかにしておかぬと、死んでどこへ行くかという大切な問題を、考えてみる事ができぬのである。教育ある昔の日本人には、いわゆる男文字の必要がかつては大きかった。すなわち手紙でも日記でも、すべて漢字で書かねばならぬ時代が久しく続いたのである。耳でよく聴く言葉でも、文字ではどう書くかを知るに苦しんで、よかれ悪しかれ今までの人の前例を追い、それをまた字面によって後々は唱え替えてもいたのである。みたまは上代からの正しい日本語だが、不幸なことにはちょうどこれに適當した漢字がなかった。それで清輔の『奥儀抄』などにも、年の終りの魂祭を解説して、

下人はみたま祭とぞ申す。公家には荷^{のさき}前の祭という

などと、口にこの語を使う者を無教育者視しているのである。しかも最初から、適當なる漢字がなかったわけでは決してない。『日本書紀』の中には、みたまという言葉が幾つも見え、それにはすべて御霊という文字が宛てられている。御霊は直訳でありおそらくはわが邦での組合せであつた。その用法を見ると皇祖神祇の御霊、または天皇の御霊とさえ記していて、その範囲は汎く顕幽の二界に及んでいた。ところがまことに是非もない事情によって、後々この二文字をそうは一般に用いられなくなったのである。国

史を読む者は誰でも記憶するだろうが、ちょうど山城の京の^{てんてい}奠定せられた初期に、帝都の急激な繁栄につれて、諸種の天変災害の頻々として起ったことがあった。それを当時の人々はその前後の政変と結び付けて、若干の憤りを含んで横死した者の、霊となつて祟りをなすものと解して怖れおののいたのである。一方にあるいは新宗教の感化もなかったとは言えない。ともかくも^{えんれいわざわい}冤癘 殃をなすという推定の下に、新たに大きな法会が執り行われてこれを御霊会といい、後に神に^{いお}斎うてこれを八所の御霊などと唱えた。そうになると普通の最も平和なる先祖のみたまを、もう御霊とは書くことができなかつたのである。しかもこの新しい「御霊」の信仰は一時的のものでなく、それからも永く続いて今日に及んでおり、またそういう怖ろしい御霊になる人も絶えなかつた。無筆な下人等の口にするのはよいとして、弘く一般に先祖を意味していた「みたま」という古語には、それ以来もう適当な文字がなくなつたのである。

(94-97)

山折も指摘していたように、たま（魂）の歴史はおそろしく古く、それを霊とか靈魂と表記し、精霊の語をあてる場合もあるが、大和言葉で由緒正しいのがたまだった。いいかえれば、日本語および日本の靈魂観においては、霊も靈魂もたま（魂）の別称であり、中身はほとんど同じと見做して差し支えないということである。

3

1955年に西欧思想界を揺るがす事件が起こった。神学者オスカー・クルマンがハーバード大学で講演を行い、「死者の復活という大胆なまた喜びあふれる初代キリスト教の希望」と「不滅の魂の生存という晴朗な哲学的期待」とを対比しながら「ギリシア的な魂不滅の信仰を初代キリスト教のものだとするあやまち」を指摘したのである。中世以来長きにわたって、魂の不滅を奉じてきたキリスト教会にとってはきわめて大きな衝撃であった。クルマンの指摘をきっかけにプロテスタントは魂の不滅を否定して死者の復活の立場に立つことになるが、カトリックは直ちには反応を示さず、1979年に『終末論に関する若干の問題についての書簡』を発表して、魂の死後の存続（不滅）を否定する見解が流布していることに反論し、教会の教えとして魂の存続を主張した。

神学上の問題を議論する能力は筆者にはないので、ここではクルマンの議論を要約しながら魂と霊の問題から見えてくるヘレニズムとヘブライズムの違いを浮き彫りにしてみたい。なお、日本語では普通靈魂不滅と言うが、例えば新共同訳聖書には靈魂という言葉は一度も使われていないことからわかるように、soulなのかspiritなのか判然としない靈魂という言葉は西洋思想における霊と魂の問題の議論にはなじまないの、ここでは靈魂という表記は避け魂不滅と表記する。

クルマンは、死者の復活という大胆なまた喜びあふれる初代キリスト教の希望と不滅の魂の生存という晴朗な哲学的期待を比較しながら

ら、死者の復活というキリスト教的期待と魂不滅に対するギリシア的信仰との間の根本的差異に焦点を当て、ギリシア的な魂不滅の信仰を初代キリスト教のものだとするあやまちを鋭く指摘する。最初のキリスト者たちによれば、完全に純粋な復活の生命は、死者が天と地とが再び創造せられるときに着せられるあの新しいからだ、パウロの言う「霊のからだ」から離れては考えられない。

「魂の不滅」はキリスト教について最大の誤った理解の一つであり、死者の復活の概念は、キリストの出来事につながっており、それゆえに、ギリシア的な不滅を信じる信仰と相容れず、初代キリスト教の復活の信仰は、魂不滅というギリシア的概念と相容れないのである。新約聖書において死は、死を友と見るギリシア思想とは真っ向から対立して、「最後の敵」として考えられている。新約聖書は魂の不滅を教えているという広くゆきわたっている誤った理解は、キリストのからだの復活は、死からその恐怖全部を奪い去ったということと、また、イエスの復活直後以来、聖霊は、信仰者の魂を復活の生命に目覚めさせたということとの確信によって、助長せられたのである。

新約聖書における死と永遠の生命とが、いつもキリストの出来事と結びついていることを認めるなら、最初のキリスト者たちにとって、魂は、本質的に不滅ではなくて、むしろイエス・キリストの復活を媒介として、またキリストを信じる信仰を媒介としてのみ、不滅となる。死は本質的に友ではなく、むしろその「とげ」が、キリストの死において、死に対するイエスの勝利を媒介としてのみ取り去られるのである。そして、すでに達成された復活は、完成の状態ではない。というのは、からだもまた、よみがえらせられるまで完成は未来に残されて

いるからである。そのことは「最後の日」まで起こらない。

不滅というギリシア的な教えに傾いていた初期の一つの傾向を、第四福音書のなかへ読みこむことは誤りである。というのは、そこでも永遠の生命は、キリストの出来事とむすびついているからである。もちろん、キリストの出来事の範囲のなかで、新約聖書のそれぞれの書が、異なった個所に強調点をおいてはいるが、救済史という見解が、すべての書に共通している。明らかに最初から、キリスト教の発端のうえにあったギリシアの影響を考慮に入れなければならないのではあるが、ギリシア思想が、救済史の見解全体に従属させられているかぎり、本格的な意味における「ギリシア化」を語ることはありえない。純粋なギリシア化は、後の時期に、はじめて起こったのである。

人間のからだは、外側の衣服にすぎず、魂が自由に動くのを妨げ、その本来的な永遠の本質に一致して生きることを妨げるのである。それは、魂にふさわしくない律法を、そのうえに負わせる。からだのうちにとじこめられた魂は、永遠の世界に属している。わたしたちが生きているかぎり、わたしたちの魂は、牢獄、すなわち、魂と本質的に無関係なからだのなかにはいつている。事実、死は、偉大な解放者である。死は、魂をからだという牢獄から連れ出して、魂の永遠のホームにつれかえるので、それは鎖を解くのである。からだと魂とは、相互に根本的に異なっており、別々の世界に属しているので、からだの破壊が魂の破壊を意味しないのは、楽器が破壊されるとき、音楽作品が破壊されないのと同じである。プラトンは、ソクラテスが全き平安と沈着のうちにどのように死についたかを描いた。ソクラテスの死は、美しい死である。ここには、死の恐怖はすこしも見られない。死は人

間をからだから自由にするのであるから、ソクラテスは、死を恐れるはずがなかった。死をおそれる者は、だれでも、からだの世界を愛していること、感覚の世界のなかに徹底的にまきこまれていることを証明している。死は、魂の偉大な友である。

ギリシアの魂不滅の思想と、キリスト教の復活に対する信仰との間の対照は著しい。たしかに、神は人間のために、悪魔を用いることができるように、死を用いることができるのである（コリント第一 15 : 35 以下、ヨハネ 12 : 24）が、それにもかかわらず、死そのものは、神の敵である。神はいのちであり、いのちの創造者だからである。復活に対する信仰は、ユダヤ的な死と罪との結びつきを前提としている。死は、ギリシア思想にあるような、神の意志による自然的な何ものであるのではなく、むしろ、神とは対立的な、非自然的で異常な何ものである。死がこの世にはいつてきたのは、ただ人間の罪によるものであることを、創世記の物語は教えている。罪はのろいであり、また被造物全体がこののろいの中に入れられるようになったのである。聖書が記している出来事の全過程を、救済史と呼ぶが、人間の罪はこれを必要としたのである。罪が取り除かれるようになってのみ、死の征服は可能である。「罪の支払う報酬は死である」からである。

肉体はそれ自体では決して悪いものではなく、むしろ魂と同じように神の賜物である。神はすべてのものの創造者である。ギリシア思想は、創造に関してまったく異なる解釈を持っているので、ギリシア的不滅の教理とキリスト教の復活に対する希望とは、まったく異なっている。創造に対するユダヤ・キリスト教の解釈は、からだと魂というギリシア的二元論全体を排除する。というのは見えるもの、肉体的

なものは、見えないものと同じように、神の被造物だからである。神はからだの造り主である。からだは、魂の牢獄ではなくしてむしろ宮であり、パウロの言うように（コリント第一 6:19）聖霊の宮である。基本的な区別はここにある。からだと魂とは、対立するものではない。神は肉体を持つものを造った後に、それを見て「良し」とされた。創世記の物語は、明らかにこのことを強調している。さらに反対に、罪はまた人間全体を、すなわち、からだだけでなく魂をも包んでいる。

キリスト者は、死の宣告を受けた破滅すべき被造物の背後に、まさに神の意志により、復活によってもたらされる未来の創造を看取する。キリスト者にとって対照されるのは、からだと魂とではなく、また外的形態と理念とでもなく、むしろ、罪のゆえに死にわたされた被造物と新しい創造とであり、朽ちるべき肉的からだと朽ちることのない復活のからだとである。

確かに新約聖書は、からだと魂の相違を、あるいはもっと正確に言えば、内なる人と外なる人との相違を知っている。しかし、この区別は、あたかも一方が本質的に善であり、他方が本質的に悪であるというような意味での対立を意味するのではない。両者は相互依存的であり、両者とも神によって創造されたのである。外なる人のない内なる人は、正当にして完全な存在を持っているとはいえない。内なる人は、からだを必要とする。ギリシア的魂との対比は明白である。すなわち、ギリシア的魂が、そのいのちを完全に展開するのは、まさに肉体から離れることによってである。しかし、キリスト教の考えによれば、内なる人の本性そのものが、肉体を必要とするのである。

パウロ神学の特徴的な用法によれば、新約聖書における肉と霊とは、

外側から人間の中にはいりうる二つの超自然的勢力である。しかし、この勢力はいずれも、人間存在そのものといっしょに与えられるのではない。全体として言えば、パウロの人間論は、ギリシア的人間論とは反対に、救済史に根ざしているということは真実である。肉は、罪の力、あるいは死の力である。それは、外なる人とともに、内なる人をも捕える。霊は、肉の大敵であり、創造の力である。霊もまた、外なる人とともに、内なる人も捕える。肉と霊とは、活動的力であり、そのままで人間の中において働く。死の力たる肉は、アダムの罪とともに人間の中にはいりこんだ。たしかにそれは、内なる人にも外なる人にも、人間全体にはいりこんだ。しかもその際、肉体ときわめて密接に結合するという方法をとった。内なる人自身は、肉とそれほど密接に関係してはいない。しかし、罪過によって、この死の力はますます内なる人までも捕えるようになった。これに反し、霊はいのちの大きな力であり、復活の基本的要素である。神の創造の力は聖霊を通してわたしたちに与えられる。旧約聖書において、霊は時に応じて預言者たちの中に働いている。新約聖書の人間観が、ギリシア人の人間観といかに違っているかということを見きわめることがたいせつである。からだと魂とはともに、それが神によって造られたというかぎりにおいて、本来よいものである。またそれらはともに、肉の死の力に捕えられているというかぎりにおいて悪いのである。それらはともに、聖霊によるよみがえりの力によって解放されることができし、またされねばならない。

それゆえ、ここでは解放というのは、魂もからだから離れることにあるのではなく、魂もからだもともに肉から離れるということにある。

人間が肉体から解放されるのではなく、むしろ、肉体そのものが自由にされるのである。しばしば引用されるマタイによる福音書第 10 章第 28 節の「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」というイエスのことばでさえ、決してギリシア的概念を前提とするものではない。このことばは、魂はからだを必要としないのだという考えを前提としているようにみえるが、しかしこのことばの前後関係からすると、そうだとは思われない。イエスは続けて、「魂を殺すことのできる者を恐れよ」とは言わないで、むしろ「魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」と言っている。それはすなわち、人間を完全に死にわたすことのできる神を恐れなさいということなのである。魂は、肉体に捕えられるのとはまったく違った方法で、すでに聖霊によって捕えられているのであるから、魂が復活の出発点であるということは真実であるということがわかる。聖霊はすでに、わたしたちの内なる人の中に住んでいる。パウロは、ロマ書第 8 章第 2 節に、「キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです」と言っている。それゆえ、からだだけを殺すものを恐れる必要はないのである。からだは死人からよみがえらされることができる。否さらに、よみがえられねばならない。魂は常に、からだなしには存続しえないのである。他方また、マタイ第 10 章第 28 節のイエスのことばには、魂を殺すことはできるということがある。魂は不滅ではない。魂にもからだにも、復活がなされなければならない。それは墮罪以来、人間全体が「蒔かれるときは朽ちるもの」（コリント第一 15：42）であるからである。聖霊のよみがえりの力による変化はありがたいもので、内なる人にとって、復

活はすでにこの現在のいのちの中で起こりうるのである。すなわち、「日々新たにされて」（コリント第二 4：16）いくことによって復活が起こるのである。しかし、肉はからだの中にその座を持っている。からだが変わえられるということは、全被造物が聖霊によって新たにされる終わりの時までには、死ぬことも、朽ちることもない終わりの時までには起こらない。

復活は、内なる人を聖霊が捕えるという意味においてのみならず、またからだの復活でもある。これは、事物の新しい創造、朽ちることのないものの創造である。この世で他の所にはどこにも、この新しい霊的なものは存在しない。他のどこにも、霊のからだは存在しない、ただキリストの中にだけ存在する。

もし肉のからだから解放された一つの霊のからだ（不滅の魂でなくして、霊のからだ）が真に存在するなら、その時こそ確かに死は破棄されたのである。最初のキリスト者の確信によれば、信仰者はもはや死ぬことがない。キリストは、死人の中から最初に生まれた者である。キリストのからだは、最初のみがえりのからだ、最初の霊のからだである。この確信の存在するところでは、いのち全体が、また思想全体が、その影響を受けねばならない。新約聖書のあらゆることばの背後に、死はすでに（死であって、からだではないことに注意）、征服されたというもう一つのことばを読むことをしないなら、新約聖書の思想全体は、七つの封印で封じられた書物となってしまう。新しい創造（新しい創造であって魂が常に所有していた不滅ではないことに注意）がすでに存在する。復活の時代は、すでに始まっている。

からだは、やはり死ぬべきものであり、また病気にかかるものであ

る。からだが、靈のからだに変わるということは、被造物全体が神によって新たに造られるまでは起こらない。その時になってはじめて、み靈以外には何もなく、いのちの力以外には何もないということになる。というのは、その時にこそ、死は最終的に破滅させられるからである。その時には、すべての目に見えるものに対して、新しい実体が生まれるであろう。肉のなもののかわりに、靈的なものが現われる。すなわち、朽ちるもののかわりに、朽ちないものが現われる。目に見えるものも、目に見えないものも、靈である。しかし、誤ってはならない、これは決して、ギリシア的なからだのない理念という意味ではない。新しい天と新しい地、それがキリスト教の希望である。こうして、人間のからだもまた、死人の中からよみがえるであろう。肉のからだとしてではなく、靈のからだとして。

おわりに

前節でのクルマンの議論の要約を通して、ヘレニズムとヘブライズムにおける靈魂觀の違いが明らかになったと思う。なお、魂の不滅性については、現在、カトリックとプロテスタントとの間で見解が異なっており、例えば石井祥裕によれば、ギリシア的な意味での靈魂觀、すなわち靈魂を体（肉体）と対立させ、人間の本来の固有のあり方を理性的靈魂にみる考え方が一定程度受容されながら教會的な靈魂論の伝統が形成され、ヘレニズム世界を支配していた、来世の存在への疑いと希望の喪失に反対して、キリスト教神学は復活の信仰を守るために、靈魂の不滅の考え方を受容していったが、その場合、ギリシア

的靈魂觀とは異なり、靈魂が本性からして不滅であるとは考えず、その不滅はあくまで神の恩恵に帰せられると考えるのがカトリックである（『新カトリック大事典』4：1373）。

ここでクルマンが熱弁をふるって際立たせたヘレニズムとヘブライズムとの違いを分かりやすく整理する意味で『聖書思想事典』からの抜粋を引用しよう。

聖書における“魂”とは、けっして体とともに人間存在を構成する一つの“部分”ではなく、命の霊によって生かされている人間全体をさす言葉である。もっと適切に言えば、魂は体に宿っているのではなく、体を通して自己を表現しながら、“肉”と同様に人間存在の全体を意味している。魂は神の霊とのつながりをもっているため、この言葉によって人間が霊的な起源を有することも指摘される。しかもこの霊的な面は、魂という語の広範な用法からも明らかなように、具象的な世界にふかく根ざしている。

魂は、命の徴ではあるけれども、命の源ではない。これがセム人の考え方とギリシアのプラトンの考え方とをふかく隔てる相違点である。後者の考えでは、魂は霊的な世界と同一視されており、そして魂は、この世界からいわば流出して、人間に真の自律性つまり命を与えるものとされている。ところがセム人にとっては、命の源は魂ではなく、“神の霊”そのものである。「主なる神は、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」のである。すべての生きもののなかには「命の息」があり、これがなければ死んでしまう。この息は、地上に生きてい

る間だけ与えられる借り物である。「息吹を取り上げられれば彼らは息絶え、元の塵に返る。あなたは御自分の息〔靈〕を送って彼らを創造される」。

このように命の徴である魂と、命の源である靈とは、人間のなかでは互いに区別されており、この人間の実存に近づくことができるのは、神の言葉だけなのである。この区別は、キリスト者の考えのなかにも移入されたため、「この世のままに生き、靈を持たない者」という表現とか、洗礼によって得た“靈的な状態”から“地上的な状態”に逆もどりした信仰者をさす“自然の人”という言葉がみられるのである。

このような思想からただちに次のような考え方がでてくる。すなわち、けっして“死ぬ”とはいわれず神に“返る”といわれる靈とは異なり、魂は、骨や肉のように“死んだり”“死にわたされたり”する。この魂は、陰府にくんだり、影のような死者の国の生活を送る。そこは、“生ける者の地”から遠く、この国のことはなに一つわからない。また、神からも遠く、神をたたえることはできない。死者は沈黙のなかに住んでいる。要するに、魂は「もういない」のである。

しかしながら、神の全能の力により、深淵の底にくだっていった魂はよみがえり、散らばっていた骨はふたたび命を得ることができる。この点に関するイスラエルの信仰は堅い。

魂が陰府にゆくといっても、それは、魂がそこで体をもたずに“生きている”という意味ではない。魂は、体なしには自己を表現しえないものであり、それ自体では独立した存在ではないからで

ある。したがって人間の不死の教えを、魂は靈的なものであるという考え方と同一視してはならない。また、この教えを聖書の啓示の遺産のなかに加えたのは、知恵の書であったとも一概にいけない。知恵の書の著者は、たしかにギリシア思想の影響を受けて、ギリシア的人間観の用語を使っている場合もあるが、その世界観はけっしてギリシア人のそれと同じではない。たしかに「朽ちるべき体は魂の重荷となり、地上の幕屋が、悩む心を圧迫する」が、この場合の魂は、命の霊ではなく人間の知性をさしている。とくにギリシア思想と異なって物質や体に対する軽視はまったくみられず、著者は、「善良だったので、わたし〔の魂〕は清い体に入った」と述べている。したがって、著者が魂と体とを区別しているとしても、それは、体から魂が分離しても真に存在すると考えるためではない。とはいえ、当時のユダヤ教の黙示文学にみられるように、魂はここでも陰府の国にゆく。人の魂を手中に握っている神は、これをよみがえらせることができる。神は、人間を不朽のものとして造ったからである。

のちに魂と体とを区別して考えるようになったとき、魂だけにあてはめていわれる事柄を、聖書は人間全体に適用している。だからといって、人間の不死についての信仰があいまいなものだったわけではない。祭壇の下で報いを待っている魂は、復活に召されているからこそ、そこにいたのである。復活は魂に内在している力の働きではなく、命の霊の業である。神は、魂のなかに、時がくれば芽ばえる永遠の種を入れている。いつか、人間全体がふたたび“生きた魂”、つまりパウロがいうように“靈的な体”となり、

完全な姿で復活するであろう。(557-60)

岡崎才蔵によれば、新共同訳旧約聖書には、「靈」という語が 190 回使用され、「魂」という語が 209 回使用されているが、「靈魂」という語は使用されていない(『新カトリック大事典』4: 1366, 1372)。またプラトンの『パイドン』の翻訳(岩田靖男訳)も、副題は「魂の不死性について」とあり、本文では「靈魂不滅」という用語以外には「靈魂」は使用されず、すべて「魂」で統一されている。さらにプロティノス全集においても「魂の本質について」や「魂の不死について」や「魂の肉体への降下について」などの作品名の翻訳からもうかがえるように、「宇宙の魂」と言われている靈魂(3: 338)の一部分を除いて、訳語は「魂」で統一されている。こうした例からも明らかにように、聖書を含む古典作品の日本語への翻訳においては、英語で言う soul と spirit は「魂」と「靈」と訳し分けられ、soul なのか spirit なのか分からない「靈魂」と言う訳語は使用されていない。

英語においても日常的には soul と spirit の間には意味の混同があり、必ずしも峻別して用いられているわけではないことは、第 2 節で取り上げた OED を含む数種類の辞書がこの 2 語に充てている語義を見ればよくわかる。しかしながら神の聖霊は Holy Spirit であって Holy Soul とは言わない。プラトンが書き留めたソクラテスの不滅の魂はプシュケーであり、それをプロティノスが受け継いだ。プシュケーは息を意味するギリシア語である。ギリシア語には同じ意味の言葉として pneuma もあるが、ギリシア的靈魂不滅における魂は pneuma ではなくプシュケーである。pneuma は聖書で用いられる言葉であり、「靈が人

間を去れば、人間は自分の属する土に帰り」(詩篇 146 : 4) と言われたり、エゼキエルが「枯れた骨」に霊が吹き込まれると生き返ると言い (37 : 4)、コヘレトが「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」(12 : 7) と言う際の霊はプネウマである。聖書でもプシュケーはたびたび用いられているがその意味は魂であり、「霊〔プネウマ〕も魂〔プシュケー〕も体〔ソーマ〕も」(テサロニケ第一 5 : 23) といったように区別して用いられている。

先に日本語では霊、魂、靈魂の三つの言葉の間には互換性があり、繰り返しを避けるための言い換えのような用い方をされているという指摘をした。人間を他の存在とは決定的に異なる特別なものとみなすような社会、例えばキリスト教社会では魂と霊や精霊との区別は重要視されるが、人間を特別なものとみなさない日本をはじめとする東洋の社会では魂と霊や精霊とはしばしば混同され、ほとんど同一のものとして考えられる傾向が強いという宗教学者島田裕巳の指摘 (『新カトリック大事典』4 : 1366) は、この日本語における三つの言葉の間の互換性を裏付ける指摘と言えよう。

霊と魂の区別を重要視する文化におけるそれらの言葉 (たとえば英語の場合だと **soul** と **spirit**) を霊と魂 (と靈魂) をしばしば混同しほとんど同一のものと見做す文化の言葉 (たとえば日本語) に翻訳するときには、少なくとも、その **soul** なり **spirit** が宗教的な意味合いで用いられているのか、宗教的な両語の区別は重視しないで日常的な意味合いで用いられているのかの見定めをする必要がある。こうした見定めをした上で、宗教的な意味合いの濃い場合には **soul** は魂、**spirit** は霊と訳し分け、靈魂という曖昧な訳語は用いないように心掛ける必

要があるのではあるまいか。

注

- 1 The soul is commonly supposed to escape by the natural openings of the body, especially the mouth and nostrils. Hence in Celebes they sometimes fasten fish-hooks to a sick man's nose, navel, and feet, so that if his soul should try to escape it may be hooked and held fast. A Turik on the Baram River, in Borneo, refused to part with some hook-like stones, because they, as it were, hooked his soul to his body, and so prevented the spiritual portion of him from becoming detached from the material. When a Sea Dyak sorcerer or medicine-man is initiated, his fingers are supposed to be furnished with fish-hooks, with which he will thereafter clutch the human soul in the act of flying away, and restore it to the body of the sufferer. But hooks, it is plain, may be used to catch the souls of enemies as well as of friends. Acting on this principle head-hunters in Borneo hang wooden hooks beside the skulls of their slain enemies in the belief that this helps them on their forays to hook in fresh heads. One of the implements of a Haida medicine-man is a hollow bone, in which he bottles up departing souls, and so restores them to their owners. When any one yawns in their presence the Hindoos always snap their thumbs, believing that this will hinder the soul from issuing through the open mouth. The Marquesans used to hold the mouth and nose of a dying man, in order to keep him in life by

preventing his soul from escaping; the same custom is reported of the New Caledonians; and with the like intention the Bagobos of the Philippine Islands put rings of brass wire on the wrists or ankles of their sick. On the other hand, the Itonamas of South America seal up the eyes, nose, and mouth of a dying person, in case his ghost should get out and carry off others; and for a similar reason the people of Nias, who fear the spirits of the recently deceased and identify them with the breath, seek to confine the vagrant soul in its earthly tabernacle by bunging up the nose or tying up the jaws of the corpse. Before leaving a corpse the Wakelbura of Australia used to place hot coals in its ears in order to keep the ghost in the body, until they had got such a good start that he could not overtake them. In Southern Celebes, to hinder the escape of a woman's soul in childbed, the nurse ties a band as tightly as possible round the body of the expectant mother. The Minangkabauers of Sumatra observe a similar custom; a skein of thread or a string is sometimes fastened round the wrist or loins of a woman in childbed, so that when her soul seeks to depart in her hour of travail it may find the egress barred. And lest the soul of a babe should escape and be lost as soon as it is born, the Alfoors of Celebes, when a birth is about to take place, are careful to close every opening in the house, even the keyhole; and they stop up every chink and cranny in the walls. Also they tie up the mouths of all animals inside and outside the house, for fear one of them might swallow the child's soul. For a similar reason all persons present in the house, even the mother herself, are

obliged to keep their mouths shut the whole time the birth is taking place. When the question was put, Why they did not hold their noses also, lest the child's soul should get into one of them? the answer was that breath being exhaled as well as inhaled through the nostrils, the soul would be expelled before it could have time to settle down. Popular expressions in the language of civilised peoples, such as to have one's heart in one's mouth, or the soul on the lips or in the nose, show how natural is the idea that the life or soul may escape by the mouth or nostrils.

Often the soul is conceived as a bird ready to take flight. This conception has probably left traces in most languages, and it lingers as a metaphor in poetry. The Malays carry out the conception of the bird-soul in a number of odd ways. If the soul is a bird on the wing, it may be attracted by rice, and so either prevented from flying away or lured back again from its perilous flight. Thus in Java when a child is placed on the ground for the first time (a moment which uncultured people seem to regard as especially dangerous), it is put in a hen-coop and the mother makes a clucking sound, as if she were calling hens. And in Sintang, a district of Borneo, when a person, whether man, woman, or child, has fallen out of a house or off a tree, and has been brought home, his wife or other kinswoman goes as speedily as possible to the spot where the accident happened, and there strews rice, which has been coloured yellow, while she utters the words, "Cluck! cluck! Soul! So-and-so is in his house again. Cluck! cluck! soul!" Then

she gathers up the rice in a basket, carries it to the sufferer, and drops the grains from her hand on his head, saying again, "Cluck! cluck! Soul!" Here the intention clearly is to decoy back the loitering bird-soul and replace it in the head of its owner. (208—210)

2 聖書からの引用は原則として新共同訳聖書に拠る。

引証文献リスト

Cullmann, Oscar. "Immortality of the Soul or Resurrection of the Dead."

Immortality and Resurrection. Ed. Krister Stendahl. New York: The Macmillan Company, 1965. 9-53.

海老沢有道他校注. 『どちりいなーきりしたん』. 『キリシタン書 耶蘇書』. 岩波書店, 1970 年.

遠藤周作. 『宗教と文学——初期評論集』. 講談社, 1977 年.

Frazer, James George. *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion*. New York: Macmillan, 1963.

フレイザー, ジェイムズ・ジョージ. 『金枝篇』. 第 2 巻. 永橋卓介訳. 岩波書店, 昭和 41 年.

Frye, Northrop. *The Great Code: The Bible and Literature*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1982.

Hawthorne, Nathaniel. *Novels*. New York: Literary Classics of the United States, 1983.

ホーソン, ナサニエル. 『緋文字』. 鈴木重吉訳. 新潮社, 昭和 32 年.

ホーソン, ナサニエル. 『緋文字』. 刈田元司訳. キリスト教文学の世界第 20 巻. 主婦の友社, 昭和 53 年.

ホーソン, ナサニエル. 『緋文字』. 大井浩二訳. 世界文学全集第 32 巻. 講談社, 1974 年.

ホーソーン, ナサニエル. 『緋文字』. 小津次郎, 大橋健三郎訳. 世界文学全集第 17 巻. 集英社, 昭和 45 年.

ホーソーン, ナサニエル. 『緋文字』. 八木敏雄訳. 岩波書店, 1992 年.

ホーソーン, ナサニエル. 『緋文字』. 小川高義訳. 光文社, 2013 年.

ホーソーン, ナサニエル. 『緋文字』. 福原麟太郎訳. 角川書店, 1954 年.

プラトン. 『パイドン——魂の不死について——』. 岩田靖男訳. 岩波書店, 1998 年.

プロティノス. 『プロティノス全集』. 田中美知太郎, 水地宗明, 田之頭安彦訳. 第3巻. 中央公論社, 昭和62年.

Twain, Mark. *Mississippi Writings*. New York: Literary Classics of the United States, 1982.

トウェイン, マーク. 『ハックルベリイ・フィンの冒険』. 村岡花子訳. 新潮社, 昭和 63 年.

トウェイン, マーク. 『ハックルベリイ・フィンの冒険』. 上下. 西田実訳. 岩波書店, 1977 年.

トウェイン, マーク. 『ハックルベリイ・フィンの冒険』. 石川欣一訳. 筑摩世界文学大系第 35 巻. 筑摩書房, 昭和 48 年.

トウェイン, マーク. 『ハックルベリィ・フィンの冒険』. 山本長一訳.
彩流社, 1996 年.

トウェイン, マーク. 『ハックルベリィ・フィンの冒険』. 大久保博訳.
角川書店, 平成 16 年.

梅原猛. 『日本の深層——縄文・蝦夷文化を探る』. 集英社, 1994 年.

梅原猛. 『美と宗教の発見』 筑摩書房, 2002 年.

山折哲雄. 『信ずる宗教、感ずる宗教』. 中央公論新社, 2008 年.

柳田國男. 『柳田國男全集』. 第 13 卷. 筑摩書房, 1990 年.

五木寛之. 『霊の発見』. 平凡社, 2006 年.

・ 辞書・事典

デュフル, X. レオン他編. 『聖書思想事典』. 新版. ゼノン・イエール翻訳監修. 三省堂, 1999 年.

上智学院新カトリック大事典編纂委員会. 『新カトリック大事典』. 研究社, 1996—2009 年.

金田一春彦, 池田弥三郎編. 『学研国語大辞典』. 学習研究社, 昭和 53 年.

松村明編. 『大辞林』. 第 3 版. 三省堂, 2006 年.

新村出編. 『広辞苑』. 第 6 版. 岩波書店, CASIO EX-word DATAPLUS 6.

Oxford English Dictionary. Second ed. Cd-Rom Version 3.01. London: Oxford UP, 2002.

『小学館ランダムハウス英和大辞典』. 第 2 版. 小学館, CASIO EX-word DATAPLUS 6.

竹林滋他編。『新英和大辞典』。第6版。研究社，2002年。

山田忠雄主幹編者。『新明解国語辞典』。第五版。三省堂，1997年。

・聖書

Biblia Sacra Juxta Vulgata Clementinam. Editio Electronica.

<http://www.wilbourhall.org/pdfs/vulgate.pdf>.

The King James Version of the Holy Bible.

[http://d23a3s5l1qjyz.cloudfront.net/wp-](http://d23a3s5l1qjyz.cloudfront.net/wp-content/uploads/2012/09/King-James-Bible-KJV-Bible-PDF.pdf)

[content/uploads/2012/09/King-James-Bible-KJV-Bible-PDF.pdf](http://d23a3s5l1qjyz.cloudfront.net/wp-content/uploads/2012/09/King-James-Bible-KJV-Bible-PDF.pdf)

『舊新約聖書』。日本聖書協会，1970年。

『聖書』。日本聖書協会，1981年。

『聖書 新共同訳』。日本聖書協会，1987年。

1. The first part of the document is a letter from the President of the United States to the Congress, dated January 3, 1861. It is a copy of the original, and is signed by the President.

Paul Auster, *Report from the Interior* (Henry Holt, 2013)

秋元 孝文

Paul Auster は小説家ではあるが、自伝的な回想録も多い。散文デビュー作の『孤独の発明』(1982)がそうであったし、『ミスター・ヴァーティゴ』(1994)以後『スモーク』(1995)などの一連の映画作品で脚本・監督として活躍したあとに、書物の世界に戻って来たのも『その日暮らし』(1997)という自伝的エッセイによってであった。その後も多くの小説作品を生み出したのち、2012 年には老いと身体をテーマとした『ウィンター・ジャーナル』を出版している。その翌年に出版されたのが、またしても自伝的なエッセイである本書、*Report from the Interior* (『内面からの報告』、以下『報告』)である。

すでに複数の自伝的エッセイがあるにもかかわらず、なぜ新たに回想記を書くのか。その理由を作家自身の「老い」に求めることも可能だろう。1947 年生まれのアースターは本書の出版時点で 66 歳であり、2010 年出版の、今のところ小説としては最新作となる『サンセット・パーク』を出版した時点のインタビューで、すでに「小説のための材料の在庫が空になりつつある」ことを吐露している。そして「次の作品が書けなかったとしてもそれを悲劇とは思わないような地点に至りつつある」と語っている。¹すでに 16 冊の小説を世に送り長いキャリアを築いた作家が、もう一冊小説を出せるかどうかにはさほど大きな

違いはない、と語る心境は理解できるし、年齢を考えても、いつまでもかつてと同じようなペースで小説を発表してほしいと期待する方が酷である。そして、本人の言葉にあるように本当に小説の材料が在庫切れなのならば、本を出すためにそこでリサイクルしうる材料は、本人の人生とかつて書いたものだけであろう。

オースターの比較的最近の他の作品も、そういうキャリアの終盤に入った作家の仕事というコンテキストに置くと理解しやすいのかもしれない。たとえば2006年の『写字室の旅』という小説は、白い部屋に閉じ込められたミスター・ブランクがアンナ・ブルームの看病の元、誰かが書いた原稿を読まされる話であるが、それがアンナを始めとしたそれまでのオースター作品のキャラクターが登場してその書き手に復讐せんとするメタフィクション作品だったことも、メタフィクションという仕掛けの実験性、前衛性（すでにその手法は以前ほど「前衛」ではないけれども）が与える印象を取り除いて考えれば、自分のかつての作品を題材としてもうひとつ小説をつくりあげるリサイクルの方策だったことがわかる。

また、『闇の中の男』（2008）は、ジョージ・W・ブッシュ政権下のイラク進攻を背景とした現在と、作中内作家ブリルが夢想する内戦を抱えたパラレルワールドのアメリカを行き来する小説であったが、この作品で言及され作品の主題と重ねられていたのが小津安二郎の『東京物語』で、この小説では『大いなる幻想』『自転車泥棒』『大樹のうた』とともに、この映画が語り直される。映画のプロットが、カットが、執拗に解説され、語り直されるのだ。『サンセット・パーク』でも同じように映画『我等の生涯の最良の年』が語り直される。こうした映画を語りなおすという手法も、材料が手元にない中で小説を書き上げるための方策だったのかもしれない。

そんなキャリアの終盤にいることを感じさせるオースターが出版した自伝的な書物である本書では、やはり振り返られるのは本人の過去、しかも、意識の芽生えた幼少期の4、5歳からコロンビア大学の学生だった20歳そこそこまでという、今の自分からは遠い過去である。全体は4部で構成されているのだが、第1セクションのエッセイ部分“*Report from the Interior*”は幼少期からの様々な思考をたどったものの、第2セクション“*Two Blows to the Head*”は、それぞれ10歳、14歳の頃に見てガツンと来た二本の映画（『縮みゆく人間』と『仮面の米国』）の語り直し、第3セクション“*Time Capsule*”は、コロンビア大学の学生だった頃に、当時の恋人で前妻のリディア・デイヴィスにあてて送った手紙の抜粋で、最後のセクションはこれらの内容に関連した写真を収めた“*Album*”である。

本書では、前作『ウィンター・ジャーナル』に続いて、二人称“*you*”の語りが取られる。しかし、“*you*”と語りかけられても読者は実際にはオースターではない。“*You liked Peter more than any other boy in your class*”と言われても、読者にはPeterが誰なのかわかるわけもなく、この*you*はオースター本人以外の誰でもあり得ない(84)。形式的には、語り手は二人称で語り、読者はその受け手となっているのだが、実際にはそうではない。この本を書く理由は“*Not because you find yourself a rare or exceptional object of study, but precisely because you don't, because you think of yourself as anyone, everyone*”と書かれており、それはこの奇妙な語りの形式の説明とも読めるが、オースターの言葉にあるような普遍性はある程度正しいとしても、むしろ実際に読者が感じるのはそれが実際にはこの二人称が事実上は語り手も語られ手ともにオースターであり、つまりはこの形式はいわば一人称の亜種であり、しかしながら一人称では描ききれないなにかを表しているがゆえ

にこのような形式を取っているのだということだろう(4)。

そして、こういった特異な形式が採用されたのも、やはりオースターの年齢ゆえではないかと思う。たとえば数十年前に書いた自分の文章を読んで、その稚拙さに驚くというのは成長したからこそであろうが、と同時に、そこにあるむきだしの熱意を目の当たりにしてたじろぐようなこともあるだろう。それはもはや自分には書けないものだ。かつての「私」は今の「私」と地続きであるという意味では「私」であるけれど、もはや同じものが書けない「今の私」がその「かつての私」を同じく「私」と呼ぶには距離がありすぎる。しかし、「彼」ではない。第三者として三人称に切り離してしまうには愛おしすぎる存在。共に生きてきた同志のような存在。だからこそ「きみ」なのではないか。

たとえば本書の第3セクション“Time Capsule”のきっかけは、オースターと同じように(オースターの原稿はニューヨーク公共図書館の **Berg Collection** に収められている)自分の原稿を図書館アーカイブに収めようとしたデイヴィスからの「昔の手紙が出てきたのだけどどうしたらいいか？」という連絡だったという。20歳そこそこの自分が書いた手紙を読む60代半ばの男を想像してほしい。きっと「きみ」の手によるこの手紙のような文章は、今のオースターには書けない。だから「きみ」なのだ。

これまで『孤独の発明』や『その日暮らし』といった自伝的なエッセイをすでに発表してきているにも関わらず、本作の前身である『ウィンター・ジャーナル』が読みごたえがあったのは、それが、ある意味「父の話」だった『孤独の発明』と対をなす「母の話」であったことや、「身体」の変化、ひいては「老い」という問題を正面から見据えていたからではないかと思うが、『報告』はそこまで徹底していな

いし、4つのセクションの構成には散漫な印象も受ける。

たとえば第2セクションの映画の語り直しについては、『幻影の書』での映画の語り直しのように、「ない」映画をあたかも「ある」かのように語ると、本書でのように本当に「ある」映画を語り直すのは意味合いが違うし、それが小説の中で主題的なものとして描かれているならば（たとえば前述の『闇の中の男』での『東京物語』はそうだった）語り直す意味もあろうが、本書でのようにむきだして語り直されても、まず「映画は映画で見ればいいのではないか、なぜ批評ではなく語り直しなのか」という疑問を感じざるを得ない。そこで少年期のオースターが「哲学的、形而上学的衝撃を受け」たり「不正への憤りで燃えていた14歳の時、まさしくこの映画を必要としていた時期に見た」というコメントや、ときとして挟まれる解釈的なコメントはもちろん興味深い(105, 135)。『仮面の米国』で主人公の危機の場面に反復されるハンバーガーを食べるという行為に着目したり、「なにか大きな仕事をしたい」と橋の設計・建設の道に進んだ主人公が、刑務所からの逃走場面で追っ手を遮るためにダイナマイトで「橋」を爆破することの皮肉を指摘してみせたりする箇所には、読み手としてのオースターの鋭さがうかがえる。しかしやはり、それなら批評を書くべきで、そうではなく延々とプロットを説明し続けるのは冗長である。

ただ、そういった欠点も多い奇妙なメモワールである本書ではあるが、先行するオースター作品を理解するために助けとなる部分も多い。

一例をあげるなら、初期小説『最後の物たちの国で』で繰り返されたゼノンのパラドクスのレトリックがある。『最後の物たちの国で』では、ものが消滅していく「最後の物たちの国」の惨状を記録する主人公アンナが書く手紙の文字がどんどん小さくなっていくという描写がある。紙がなくなってきたので文字を小さくしていくのだ。現実

的には小さい文字はいつか判読不能な黒点になるはずだが、理論上は、文字を小さくし続ける限り、紙の余白は埋め尽くされることがない。同じようにファーディナンドはボトルシップを作り、それをいずれは「目に見えないほど小さい」ものにしたい、と言う。目に見えないほど小さなボトルシップは、存在が認識不可能だという点で存在しないと同じだが、パラドクスの世界では大きさを半分にしながら続けていく限り、永遠により小さいボトルシップを作れるはずだ。というように『最後の物たちの国で』ではゼノンのパラドクスが繰り返され、それがこの終末へ向かうかに見える世界が、いつまでも終末へ行きつくことがないであろうことを暗示しているのだが、本書ではオースターの実際の手紙で、紙がないから文字が小さくなっていくという箇所があり、これは前掲の小説で描かれた事象のもととなった現実的な体験であろう。さらには、オースターが語り直している映画『縮みゆく人間』は、主人公が放射能と農薬の影響でどんどん小さくなって行って、最後には目に見えない微粒子となろうとも、それでも消滅はしないという結末になっている。最後に彼は“To God there is no zero. I still exist!”と叫ぶ。いかに小さくなろうとも、サイズが半分になり続けていこうが、それがゼロになることはなく、ゼロにならない限りは存在し続けている。0.01であろうが0.001であろうが、それとゼロとの間には存在と非存在の大きな断絶が横たわっているのだ。こういったのちの作品に表出した思想の起源を幼き、あるいは若きオースターの中に発見することも可能だ。

同じように興味深いのが、自身のユダヤ人という人種的特性を発見するところである。オースターは戦後のアメリカ生まれだが、それでもナチスによる迫害の記憶は新しく、自分が自分であるというだけで暴力的な他者から殺されかねなかったという歴史の発見は、衝撃だっ

たに違いない。ユダヤ人のアウトサイダー性、home にいてもそこを完全に home だとはみなせないという居場所の不確かさ、同じように居場所が不確かなアフリカ系やネイティブ・アメリカンへの共感、ひいてはすべての“outcast”たちへの共感、そういったものの起源を読み取ることも可能だろう。

『孤独の発明』でわずかに触れられたエピソードでもあるが、小学校の頃「ユダ公」とからかわれたオースター少年は、学校でクリスマスのお祝いに出席してクリスマスキャロルを歌うのを拒み、ひとり教室に残る。その描写は美しい。

The sudden silence that surrounded you as you sat at your desk, the click of the minute hand on the old mechanical clock with the Roman numerals as you read your Poe and Stevenson and Conan Doyle, a self-declared outcast, stubbornly holding your ground, but proud, nevertheless proud in your stubbornness, in your refusal to pretend to be someone you were not.(73)

ユダヤ人であるがゆえにどこにも十全たる home がないことを自覚した少年時代のオースターは、ひとり教室に残り、普段はクラスメイトたちで騒がしい教室が静まりかえったなか、たったひとりで座っている。しかしその傍らには書物がある。

本の世界、たぶんそれこそが彼にとっての home となった。それは outcast しかいないような場所である。

そして彼は作家になった。

そんなオースターの起源をたどるための一冊である。

ⁱ Halena de Bertodano, "Paul Auster Interview." *Telegraph*. 16 Nov. 2010. Web. 23 Jan. 2014.

甲南英文学会規約

- 第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。
- 第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を図ることをその目的とする。
- 第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 研究発表会および講演会
 2. 機関誌『甲南英文学』の発行
 3. 役員会が必要としたその他の事業
- 第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する。
1. 一般会員
 - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
 - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
 - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
 2. 名誉会員 本会の発展に著しく貢献した者
 3. 賛助会員
- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、大会準備委員長1名、編集委員長1名、幹事2名。
2. 役員の任期は、それぞれ2年とし、重任は妨げない。
 3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
 5. 会計、会計監査、大会準備委員長、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
 7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
 8. 評議員は、会員の意思を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 大会準備委員長は、大会準備委員会を代表する。
12. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
13. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間3,000円、学生会員については1,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。

3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 大会準備委員会 第3条第1項に定められた事業を企画し実施する。

2. 大会準備委員は、大会準備委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は3名とする。

第10条 編集委員会 第3条第2項に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学から若干名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第11条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。

この規約は、昭和62年5月31日に改訂。

この規約は、平成7年7月1日に改訂。

この規約は、平成11年6月26日に改訂。

この規約は、平成13年6月23日に改訂。

この規約は、平成17年7月3日に改訂。

この規約は、平成21年6月27日に改訂。

この規約は、平成22年7月3日に改訂。

この規約は、平成23年4月1日に改訂。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は 1 部プリントアウトして郵送するとともに、**Word** ファイル形式 (.doc)、あるいはリッチテキスト形式 (.rtf) の電子データを任意の方法で編集委員長宛に提出する。和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスは 65 ストローク×15 行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
 - イ. 和文：ワードプロセッサ（40 字×20 行）で A4 判 15 枚程度
 - ロ. 英文：ワードプロセッサ（65 ストローク×25 行、ダブルスペース）で A4 判 20 枚程度
4. 書式上の注意
 - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
 - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
 - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
 - ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook, 7th ed.* (New York: MLA, 2009)（『MLA 英語論文の手引き』第 6 版、北星堂、2005 年）に、英語学の場合 *Linguistic Inquiry style sheet* (*Linguistic Inquiry* vol. 24) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は 11 月 30 日とする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を 1200 字（英文の場合は 500 語）程度にまとめて、プリントアウトしたもの 1 部を電子データとともに大会準備委員長宛に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割り振りは、大会準備委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、原則として一人 30 分以内（質疑応答は 10 分）とする。

ISSN 1883-9924

甲 南 英 文 学

No. 29

平成 26 年 6 月 13 日 印刷

— 非 売 品 —

平成 26 年 6 月 28 日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

甲南大学文学部英語英米文学科気付
